

防衛大学校同窓会機関誌

# 小原台だより



目次

Vol. 8

平成13年1月1日  
発行 防衛大学校同窓会

編集 吉田顯彦 熊林俊一 森田卓也  
印刷 ㈱エイコープリント



# 新学校長紹介

## ご挨拶



防衛大学校長  
西原 正

昨年四月、防大の第七代目の学校長に就任致しました。先達が営々と築いてこられた栄えあるよき伝統を守り、二十一世紀の要請に応えられる防衛大学校を創つていく責任を痛感しております。

就任以来痛感致しますのは、防衛大学校はじつに多くの防大外の組織、個人によって支えられているということ。なかでも全国、全世界の至る所で活躍されている防大同窓会の皆様は、防大にとってきわめて貴重な存在です。同窓の先輩たちがいきいきと活躍していただける姿は、何にもまして現役学生にとつての修練の励みになります。

防大はいまいろいろな意味で曲がり角にきているように思います。例えば、冷戦が終結した今日の国際情勢のなかで、防大生に対する教育・訓練のあり方はこれまでと同じやり方でいいだろうか、また少子化傾向が急速に進む日本社会にあつて、防大は自衛隊が必要とする人材を十分集めることが出来るだろうか、それが出来ない場合はどういう対策が考えられるだろうか、など基本的な問題に取り組みねばなりません。

最近の日本の若者は精神的に弱く、日本人としての誇りをもっていないということがしばしば指摘されますが、防大生の多くは、一般的基準から見れば、礼儀正しく、規律をよく守り、そして強い忍耐力と民族的誇りをもって卒業していきます。これは学生の教育・指導にあたるものにとつては、満足できることです。しかし未来の幹部自衛官は部下を惹きつける人間的魅力をもっていることが必要です。その意味で、防大教育にあつては、これまで以上に、

心を磨く徳育を重視していくつもりです。

さらに自衛隊が今後これまでに増して国際活動に従事することが多くなることに鑑み、防大生の時にできるだけ異文化と触れ合うことの経験をもつことを強調しております。防大は現在七カ国からの留学生を迎えており、また約三〇名の学生を毎年八カ国に派遣しております。

防大は来年いよいよ創立五十周年を迎えます。それに合わせた建物の改築などを鋭意進めておりますが、記念講堂正面の壁画やそれと併設する図書情報館周辺における記念碑などは、同窓会から寄贈していただくことになっていきます。これらは同窓生と現防大生との結びつきのシンボルとしての役割を果たしてくれそうです。現役学生たちは先輩の温かい支援を胸に秘めて日課に励むでしょう。

同窓各位がご健康のうちに、それぞれの場にあられて、日本のため世界のために活躍下さることをお祈り致します。

### 【学校長の経歴】

昭和12年8月4日生 大阪府出身
昭和37年3月 京都大学法学部卒業
昭和37年4月 社会思想研究所研究助手兼翻訳助手
昭和39年8月 米国ミシガン大学大学院政治学修士号取得
同大学日本研究センター研究助手
同大学政治学博士号取得
昭和47年12月 京都産業大学助教授(外国語学部国際関係コース)
昭和48年4月 京都産業大学助教授(外国語学部国際関係コース)
昭和50年2月 米田サウスカロライナ大学客員教授
昭和50年10月 防衛大学校教授(社会科学教室、国際関係論学科)
昭和52年4月 オーストラリア国立大学国際関係学部客員研究員
昭和54年7月 米国ロックフェラー財団国際関係部客員研究員
昭和56年7月 防衛研究所第一研究室長兼防衛大学校教授
平成5年4月 防衛大学校教授 社会科学教室主任
平成9年4月 防衛大学校教授
平成12年4月 防衛大学校長

この間、日本国際政治学会会員、アジア政経学会会員、財団法人平和・安全保障研究所研究委員、国際戦略研究所理事、日米欧委員会メンバー、日英2000年委員会委員、防衛学会常任理事、日韓フォーラムメンバーなどを歴任

## 目次

新学校長紹介	1
同窓会長挨拶	1
50周年記念事業	2
防大特集	2
小原台は今	4
日米学生会議の防大研修	5
第6回国際防衛学セミナー	7
校友会活動状況	9
行事	9
ゴルフ、テニス・囲碁・カッター	10
頭彰碑献花式	12
卒業留学生歓迎夕食会	12
中期事業	12
タイ支部の発足	12
ホームカミングデーの実施	12
東海地区支部の発足	13
同窓会ホームページの開設	13
同窓生アラカルト	14
期生会だより	14
第1・4・5・6	15
7・14・24・26・38期	15
支部だより	15
北海道・九州・沖縄地域支部	19
広島地区支部	19
会計報告	21
お知らせ	22
表紙	22
シンボルトワーから見た課業行進	22

# 同窓会長挨拶



阿部 博男

明けましておめでとう御座います。皆さんは、多難だった前世紀を越えて、希望に満ちた21世紀を、ご家族ともども、或いは国内外の勤務地で新たな感慨を持って迎えられたことと思います。

20世紀は、科学技術の驚異的な進歩で生活が豊かになった反面、驚くほど多くの命が失われた100年でした。わが国は、世紀の後半、平和のうちに国の富を充実することができませんでした。このことは、戦後の指導者の叡知と、国民の勤勉な働きによるものと言えます。この平和の維持のため、防衛大学校が、その一翼を担ってきましたことは、私達の最も誇りとするところです。専守防衛という戦略環境のなかで、見事に平和維持の任務を遂行する一方、ペルシャ湾の掃海を初め多くの国際貢献、また、今日では三宅島での火山監視活動、住民避難支援、それに各地の地震での災害復興等には必ず同窓生の何人かが中核として参加しており、その真摯な活動振りに、深く関係者の感謝と敬意を受けていると聞いております。真に喜ばしいことと言えましょう。

この私達の母校、防衛大学校は昭和27年発足し、来る2002年には創立50周年を迎えることになりました。同窓会は昭和36年1月に発足しています。

私達が自衛官の現職の間は、同窓会に関心を持つことが少なかつた様に思います。退職して一般の会社に入ってみますと、同窓生の有難さが身に染みてきます。青春時代を共に過ごしたというだけで、理解し合えるものがあり、嬉しいものです。

定年で退職する者が、続々と出て来るようになって、同窓会のあり方が見直されたのは自然の成り行きであったと思います。平成8年になって新しい構想で運営されるようになりしました。その活動の一つとして、同年、同窓会は佐久間委員長を中心とする創立記念事業委員会を設立し、事業の決定と、その費用の募金をしてきました。各種の事業は、ほ

ぼ固まり、本年度予算で事業に手をつけるところまでできました。来年、創立記念式典が行われる11月までに、完成を目指して鋭意努力をしているところでです。

母校の創立を記念して、何かをやりたいという気持は、私たちの様に自衛隊を離れた者と、未だ現役で活躍している現職とは、温度差があることは理解できます。この募金については、大方の賛同を得ていることなので、何卒宜しくお願い致します。

同窓会として、考えなければならぬ問題が2つあります。その一つは、これから、次々と定年で自衛隊を離れる者が出てきますと、現職の者との構成比率が、同等に近くなつてきます。現職の方々に同窓会について関心を持つて頂かないと、退職者のための同窓会ということになり兼ねません。是非、現職の皆さんに同窓会活動への参加・協力をお願いいたします。参加・協力できる様な、具体的な活動の提案をお願いしたいと思います。次の問題は、会費です。入会費ということですが、一度に納めて貰っています。入会するに相応しい魅力のある同窓会でなければならぬのです。そうでないと、同窓生ではあるけれども、同窓会の会員ではないという人が増えてしまいます。

新たな構想で同窓会活動が再出発してから、五年目に入りました。

これまで、漠然とした地域的な同窓生の集まりであったのを、まとまり易い地域支部として、現役と退職者で支部を設立してきました。北海道、東北、中部、関西、中国、九州、沖縄で支部が設立されました。関東地区は会員が多いため、支部の設立が遅れています。現在、考え方をまとめているところでです。

外国では最初、一昨年11月、33名の卒業生でシンガポールに、そして昨年8月、88名でタイ王国に支部が設けられました。それぞれの国に忠誠を誓いながら、日本への想いで繋がり、自信をもって祖国の平和と繁栄に活

躍している留学生の様子を見て感動しました。卒業後、少なくとも一度は日本に招待し、更に強い繋がりを持ちたいと感じた次第です。

昨年、初めて一期生が、学校長の招待でホーム・カミング・デー行事に参加し、第44期生の卒業式に立会いました。最近の世相とは掛離れた厳肅さの中で、しばし来し方を想い、感慨に耽りました。卒業以来初めてとか、嫁、孫に学校を見てもらっている者等多士済済で、実現して頂けたことを嬉しく思いました。今年は二期生の番ですが、昨年以上の成果を期待しています。

同窓会の行事である、四月の短艇競技、五月のテニス大会、九月の囲碁大会、それに十月のゴルフ大会は順調に行われています。現役が参加できる機会は限られており、退職者でも、ごく一部の同窓生しか参加できていないことは残念です。年々、裾野を広げ希望者はなるべく多く参加できるようになることを期待し願っております。この一部の人の参加でも、ボランティアで構成する事務局はフル回転で、各種目の会員の積極的な活躍と期生会の協力がなくては、同窓会の行事は発展して行かないと感じています。

その他に、コンピューター・ネットを使った防衛に関する意見交換の場の発足とか、防衛問題に関する出版への助成とかが考えられています。

今年は、プリ創立50周年の年です。50周年のリハーサル的年ともいえます。同窓生一人一人の同窓会事業への積極的な姿勢こそが、21世紀に突入して行く同窓生の心意気を示すものと考えます。その盛り上がりの中で、創立50周年の年を迎えたいと思います。最後に、同窓生各位並びにご家族のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

# 同窓会記念事業

記念事業委員会

## 1 全般

平成十二年は、募金活動を終える時期に当たると最終的な募金依頼を実施しました。また、現在までの醜金状況を基礎として、各記念事業の予算を概定し事業を具体化するのための見積り作業を開始し、順調に進んでおりました。

ところが、昨年八月中旬以降、平山画伯の協力を得ることに反対するごく一部の活動が顕在化し、同画伯に直接的な迷惑をお掛けする事態となりました。このため、平山画伯に対する協力依頼を断念せざるを得ないと判断し、十二月七日の代議員会で承認を得たところであります。

誠に残念な結果となりましたが、防大五十周年の節目は二年後に迫っています。委員会としては、計画を再構築し記念事業の成功に向けて努力を続ける所存であり、引き続き同窓生の皆様の積極的なご協力、ご支援をお願い致します。

## 2 記念事業の進捗状況

### (1) ステンドグラス

○ 委員会は、平山画伯の原画をステンドグラスとして多目的講堂の正面に掲げる計画を記念事業の中心と位置づけ、多くの同窓生の賛同を得ながら取り組んでまいりました。したがって、このような事態に至った経緯を明らかにする責任があると考え、以下に記すことに致します。

○ 平山画伯は、私達同窓生が生きてきた時代を代表する日本画家の第一人者であり、加えてご自身の体験を踏まえた芸術を通し

ての国際平和を求める行動、防大卒業式における祝辞等で示された自衛隊に対する深い理解等から、記念事業に対する協力を得られる最適任者として原画作成をお願いし、内諾を得てきました。

○ しかし、一部の同窓生から、平山画伯が特定の国との友好活動を行っておられるとして、同画伯に対する記念事業協力依頼に反対する意見が出てきました。

委員会としては、反対意見を聞きながら、同画伯に対する誤解を解く努力を行うとともに、同窓生等の議論、説得によって理解が得られるものと判断し、同窓会の承認を得て事業を進めてきました。

○ ところが、ある同窓生が反対意見を雑誌に投稿するとともに、同趣旨の文書を配布し、その中に連絡先として防大、同窓会本部及び平山画伯、委員長の自宅の電話番号が記載されていました。その後、同窓生以外の第三者による脅迫まがいの電話が画伯のご自宅にかけられるようになり、平山画伯から記念事業に対する協力辞退の申し出がなされました。その理由は、同画伯に対する誤解に基づく一方的な非難が行なわれたこと、それによって同画伯のご家族が危険を感じられるに至ったこと、芸術の世界に政治的な論議を持ち込んだことが挙げられています。

○ 同窓会記念事業に対する協力を、善意に基づくボランティア活動として承諾された平山画伯にご迷惑を掛ける行為はあってはならないことであり、またこの事態がさらに紛糾することによって防大同窓会ひいては自衛隊の体質に対する国民の批判が生

じたり、防大創設五十周年というお祝いの事業が論争を抱えたまま推移することは避けるべきであるとの判断から、平山画伯への協力依頼を断念することに致しました。結果としては、誠に残念の極みであります。

○ 一方、防大が建設を進めている多目的講堂は本年末には完成の予定であり、その入口正面にステンドグラスを設置することを前提にして設計、建築が行われていることから、防大当局はその実現を求めています。また、ステンドグラス制作を依頼してきた清家先生をはじめとする関係者は、同窓会の記念事業に対して引き続き協力することを承諾されました。委員会としては、講堂正面にステンドグラスを設置する構想を実現するための計画を検討のうえ、代議員会に報告する予定であります。

### (2) 中央広場の彫刻像

多目的講堂の前庭として整備される中央広場に設置する予定の彫刻像については、防大当局と調整しつつ、モチーフの確立、イメージの確認に資するデッサン作成を複数の作者に依頼しましたが、結論を得るに至りませんでした。今後、モチーフについては日本唯一の軍学校としての特質、すなわち文武の両立、陸・海・空の統合、国際性、平和の確保と、学生歌、学生綱領、若人、自主自律等の考慮事項を踏まえながら、現在活躍中の各彫刻家の作風を確認のうえ、制作を依頼するための人選を進めることにしています。

### (3) 顕彰室の整備

防大当局から顕彰室のモニメントとして三案が提示されており、これらのイメージの優劣、所要経費等について検討を経て結論を得る予定で、作業を進めています。

### (4) 記念ビデオの作成

五十周年を機に卒業生の思い出の記録(仮題:防大五十周年の歩み)を作成し、希望者には一千元程度の価格で頒布するための準備を進めたいと考えています。ビデオの資料提供は防大勤務者OBの久保田氏の協

力を得るものとし、ベースとなるシナリオを検討した後に、業者に依頼して本年春頃に作成を開始する予定です。

### (5) 記念講演会等

五十周年にふさわしいテーマを選定し、講師またはパネラーを選考して中央における記念講演会等を開催するための検討を進めています。また、これとともに地方における講演会等の実施についても検討することとしています。

### (6) 記念マーチの作成、贈呈

五十周年記念マーチの作成については、防大吹奏楽部OB会が主体となつて事業を進める方向で作業を進めています。

### (7) 人材活用機構(サイバー・インスティテュート)の創設

安全保障・防衛等に関する同窓生の知見を活用するためのコンピュータ・システムの創設について研究し、同窓会による設置・運営が可能な場合はその創設のための資金提供を準備することを検討しています。

### (8) 醜金者名簿の作成、醜金者に対する小記念品の贈呈

平成十四年秋に実施が予期される記念行事に間に合うよう準備を進めることにしています。

## 3 募金状況

募金期間は平成十三年三月末までとなっていますので、昨年六月末に今まで募金に応じられていない同窓生を主体に最後の協力依頼を行いました。

募金目標額は一億二千万円ですが、現在の醜金総額は一億八百万円を超えました。期別、陸・海・空別の醜金状況は別表のとうりであり、若年期の参加状況がやや低いようです。残された募金期間内での現役組の協力を期待しております。

なお、醜金された淨財は、全額が銀行口座で厳重に管理されていることを再度報告させていただきます。

# 防大五十周年記念事業募金状況

(平成12年11月21日現在)

期	対象者数	募 金 者 数				合計	応募率%	募金額 (×1000円)
		陸	海	空				
1	299	151	61	46	258	86.3	5,700	
2	308	147	46	46	239	77.6	5,120	
3	447	151	56	90	297	66.4	6,500	
4	419	148	49	76	273	65.2	5,680	
5	491	126	50	73	249	50.7	5,210	
6	427	117	59	87	263	61.6	5,430	
7	419	131	55	56	242	57.8	5,045	
8	414	103	44	59	206	49.8	4,050	
9	424	103	57	59	219	51.7	5,190	
10	442	114	50	61	225	50.9	3,870	
11	462	101	57	56	214	46.3	3,660	
12	417	100	48	57	205	49.2	2,710	
13	403	99	40	60	199	49.4	2,340	
14	461	117	66	85	268	58.1	3,052	
15	401	122	53	54	229	57.1	2,495	
16	402	111	35	58	204	50.7	2,290	
17	455	110	56	58	224	49.2	2,390	
18	399	87	57	55	199	49.9	2,110	
19	413	104	36	55	195	47.2	2,090	
20	356	83	37	37	157	44.1	1,625	
21	465	84	57	38	179	38.5	2,040	
22	431	75	62	38	175	40.6	1,824	
23	378	70	34	36	140	37.0	1,545	
24	417	65	46	31	142	34.1	1,450	
25	374	76	47	32	155	41.4	1,630	
26	469	85	63	45	193	41.2	1,995	
27	364	48	63	23	134	36.8	1,480	
28	403	62	45	32	139	34.5	1,450	
29	414	63	38	28	129	31.2	1,325	
30	369	40	31	24	95	25.7	1,040	
31	396	56	34	31	121	30.6	1,240	
32	334	48	22	32	102	30.5	1,040	
33	378	68	27	29	124	32.8	1,280	
34	354	58	20	46	124	35.0	1,272	
35	439	55	26	29	110	25.1	1,161	
36	340	32	21	28	81	23.8	840	
37	366	33	21	26	80	21.9	800	
38	425	34	19	29	82	19.3	740	
39	338	41	18	29	88	26.0	840	
40	376	26	14	45	85	22.6	820	
41	403	94	41	29	164	40.7	1,465	
42	407	13	2	4	19	4.7	200	
合 計	16,899	3,551	1,763	1,912	7,226	42.8	104,034	

備 考	1. 募金総額	105,379,133円	2. 募金への御協力をお願い致します。 (期限 : 平成13年3月末) 現役1口 OB2口基準 (1口1万円) 郵便局振替口座番号 00150-6-352140 加入者名 防大五十周年記念事業委員会
	(1) 団 体	882,719円	
	① 真駒内	400,000円	
	② 勝 田	185,058円	
	③ 府 中	103,634円	
	④ 24期生	194,027円	
	(2) 未確認募金者等	462,414円	

# 小原台は今

防衛大学校訓練部長 海将補 小林 拓雄

平成14年に創立50周年を迎える本校では、現在施設の老朽更新が進んでおり、平成12年度中に本館が元の場所に完成する予定です。また本館と時計台の間には多目的ホールと図書情報館を建設中であり、50周年に合わせて完成する予定です。

これに引き続くものとして、14年度から学生舎を立て替えるべく計画中です。学生舎生活を通じて行われる教育補導は、防大生教育の三本柱の一本であり、その重要性は今後も変わるものではありません。諸外国の士官学校における学生舎の位置付けも同様であり、学生舎生活を通じて将来国防の任務を負うリーダーの素質が育成されると言えると思います。

従って新学生舎の整備にあたっては、如何なる要件が満たされるべきであるか十分な検討を行い反映させる必要があるとの観点から、幹事を委員長とする学生舎整備委員会を発足させ、作業を実施しているところです。これまでに本科卒業生約1万9千人を送り出した学生舎がありますが、その部屋編成は社会環境の変化や、卒業生に求められる資質についてのさまざまな検討を反映しつつ、まさに試行錯誤してきました。その足跡は次のとおりです。

小原台に現学生舎が完成した昭和30年から53年までの四分の一世紀は、8人部屋が続いたわけでありませんが、その中でも当初の学年・要員混合部屋から同一学年・要員混合部屋へ、次いで学年混合・単一要員部屋を経て再び学年・要員混合部屋へと変わりました。昭和54年に8個学生舎体制となり、1室4人の学年・要員ともに混合の部屋編成を1年間

とつた後、同一学年、要員混合の4人部屋制が8年間続きました。この後昭和63年から逐次同一学年・要員混合の2人部屋制へ移行し、平成8年までこの部屋編成が続いた後、平成9年からはまた室員4人の学年・要員混合部屋の編成に戻って現在に至っています。

半世紀に及ぶこれらの経験を生かすとともに、これからさき育ってくる青年の特質を予測し、本来防大生が卒業時に保有すべき資質を育てるために、必要な学生舎の機能等は、どのレベルに持つてゆくべきか、まさに今検討の最終段階に入っています。現在母校の職員としてその計画に携わることになった我々は、今後少なくとも50年間は使われることになるであろう新学生舎のアウトラインとして最も適切な姿を導くよう尽力しています。

検討の中では、諸外国の例も参考にすべく情報収集しています。その結果によりますと、諸外国の士官学校ではほとんどが同一学年の学生2ないし4名で1室を構成させている状況です。これは過去防大が一時期採用したもののさまざまな理由から再び別の方式に変更したものであります。また上級生と下級生の関係についても調査しましたが、上級生による下級生指導方式を採用しているところはどちらかといえは少数派であり、中には各学年間の交流にはほとんど意を用いていない国もあるなど、防大の伝統的學生舎指導理念と大きく異なり、直接参考にならないところもありました。

外国にならって、学生特に下級生にゆとりを持たせるとの考え方から、一時期同一学年2人部屋に踏み切ったものの、団結の低下、リーダーシップ養成の不充分等ネガティブな

傾向が顕在化したことは、特徴的なこととして記憶に新しいところです。現代日本の幼年期から少年期における家庭教育と、外国のそれとの違いからくる入校生の素質における潜在的な違いが問題の根底にあるものではないかと思えます。

また学年混合の多人数部屋に戻さなければならなかったことについては、欧米では民間の会社もオフィスは個室タイプにしているのが普通であるのに対し、日本では大手の会社でも未だに大部屋制度であるという例が示すように、上下関係のあるグループの中での公私にわたる日常の接触が、日本人の組織の一人としての能力をうまく活性化するのはないかとも思えます。

2人部屋から4人部屋へUターンして4年目となりますが、その当時学生間で燃え上がった不満の声も、今やロッカーの中の記録に残るのみとなりました。更に今年度は1学年が多数入校したことから、現在実質的には5人以上の部屋が全体の31パーセントを占めるに至っていますが、学生はがんばっています。学生舎整備委員会では、防大初期のころの8人部屋も検討の対象に含めて、人間文化学科の先生も委員として参加して検討中であります。

同窓生の皆様には、部隊勤務等を通じ学生舎のあり方について様々なお考えをお持ちのことと思います。本件についてご意見をいただければ幸いです。

## 部屋編成の変遷

	大部屋	8人部屋	4人部屋	2人部屋
S28～29	○			
S30～31		○		
S32～39		△		
S40～47		□		
S48～53		○		
S54			○	
S55～62			△	
S63～H4			△	→ △
H5～8				△
H9～			○	

○：学年混合、要員混合 △：同一学年、要員混合 □：学年混合、単一要員

# ●日米学生会議の防大研修●

## 日米学生会議のメンバー26名が 本年も防衛大学校研修に来る。

防衛大学校 防衛学教育学群 新治1佐 (13期航空)

第52回日米学生会議実行委員長、慶応大法  
学部政治学科3年〇〇学生から5月8日、丁  
寧な防大研修の依頼状をもらった。内容は、  
昨年、第51回メンバーとして防大を研修し貴  
重な交流の場を設けて頂いたとする御礼にと  
もに、今年度も、防大研修は日本側参加者の  
準備活動に欠かすことができない最も重要な  
活動と言っても過言ではないので、昨年度と  
同様に研修の機会を設けさせて頂きたいとい  
う依頼であった。

日米学生会議は、日本と米国の優秀な学生  
代表各30名が、政治・経済・文化・安全保障  
などの諸問題について自由・対等の立場で約  
1ヶ月間米(日本)国内を旅行しながら議論  
する会議であり、日米相互に隔年ごと実施さ  
れる。歴史は古く1934年に始まり第二次  
世界大戦の中断を経て1964年以降毎年実  
施しており、第52回目当たる本年は、7月  
21日〜8月21日、ハワイ大学、ワシントン、  
ニューヨーク、ハーバード大学などで行われ、  
外務・文部省、米国大使館などが後援してお  
り、宮沢元首相やキッシンジャー氏などもこ  
のメンバーだったと言われる。松本前校長  
も「この会議のメンバーになることは将来に  
わたって勲章になるよ、防大生も参加させて  
やりたいね」と言っておられたような優秀な  
メンバーが集まる会議である。

防大では、防衛学教育学群が主体となって、  
平成8年度以降、日米学生会議に参加する日

本側の一般大学生の要望を受け、毎年6月に  
約半日間、約20名を防衛学に関する事前勉強  
のために受け入れている。昨年度実施したそ  
の一般大学生の所感の一端を紹介すれば、  
「これを有意義と言わずに何を言おうといっ  
た感じです。こんなにも純粋に国のことを考  
え、魅力的で明確な意思を持つ学生に出会っ  
たことを本当に幸せに思います。感動しまし  
た(筑波大人文2年)」としており、毎年、  
その評価は高まっている。それが証拠に、初  
めは12名で始まった研修が年々増え、5回目  
に当たる今年は26名(日米学生会議メンバ  
ー約30名の内概ね全員)が来ることとなり、毎  
年、北海道から沖縄までの一般大生が半日の  
防衛学ゼミや討論などのために、前日は東京  
のホテルに泊まり、自主的に時間と交通費を  
使って研修に来るのですから――。(従って、  
一度でも防大に研修に来て学生が有意義と感  
じなかつたら二度と来なくなる)

6月16日、東大×9、慶応×10、早稲田大  
院×1、中央、青学、法政、明治、立命館、  
千葉×各1の計26名の学生が来校した。当日、  
11時〜18時の間、概況説明(防衛学、軍事力  
を学ぶ必要性について)、防衛学ゼミ聴講  
(戦史、戦略、統率など)、本科学生との討論  
(日米関係等)など実施した。

終了した後の研修生の所感は、「防大訪問  
は有意義、貴重な経験、新鮮等」15名、「防  
大生は規律正しい、国防の意識が高い」10名、

「防大生は明るく、気さく」10名、「このよう  
な機会を増やしてもらいたい、また訪問した  
い」14名であった。一方、防大生側は、「レ  
ベルの高い一般大学生と接して刺激を受け  
た、有意義であった」15名、「討論を通じて  
勉強になった」15名、「彼等に親近感を持て  
た」6名、「今後も実施したい」11であった。

特に、研修生の所感は防大生などに自信を  
つけさせるもので、例えば、「日本の社会の  
中で軍事という存在があるということがとて  
も新鮮だった。国際社会を考える上で絶対に  
忘れてはいけないファクターであったにもか  
かわらず、今まで考えず、むしろわざと目  
をむけていたように思う。防大生は、さわか  
かな人達だった。きびきび、さばさばしてい  
て話していて気持ち良かった。むしろ国防を  
担っている人々の方が良く勉強しているよう  
に思う(東大)」「安保一つをとっても上の空  
で議論している僕らとは意識が違う。先生の  
気合いも自分の学校とはレベルが違った。も  
っと議論をしたかった。特に憲法に対する意  
見、安全保障、他国の脅威が細かく説得力が  
あった。学生間の仲が良さそうで、先生・学  
生同志の熱さに圧倒されてしまいました(慶  
応)」「防大生は学生でありながら社会的責任  
を負っているという自覚があり、素晴らしい  
と思いました。自分の周りには、大学生とし  
ての業に誇りと目的意識を持っている学生は  
あまりいない。その点で貴重な存在だと思  
います。きれいに線の入ったシャツの防大生の  
自信が伝わってきて自分の生き方を大切にし  
ていると感じた(早稲田大院)」「防大生から  
学びたいこともまだまだたくさんあるし、こうい  
った機会を通じてもっと高めあっていたら  
いい。一般の学生にも防大の授業内容(国防論  
等)へのアクセスを得るチャンスが与えられ  
るべきだ(東大)」

「学生の方々の日本を代表する意識、背負  
っているという意識の高さ、それを実際に外  
部から求められているということをきかせて

頂き印象的であった(慶応)」「各教官のお話  
を聞いていても日本の防衛に関して、プロフ  
েশヨナルな見識と熱い思いを抱いておられ  
るのを感じる事ができました。防大生の  
方々の深い見識と考えを聞くことができて大  
変有意義であった(慶応)」「時間厳守や授業  
にきちんと出るなど当然のことなのに普段私  
達が守れていないことを日常のこととしてい  
る人達に会い、良い刺激になった(中央)」

「大変充実したものだ。改憲派の僕とし  
ては、9条の問題について色々聞けて良かつ  
た。1人の防大生が9条の問題があってもそ  
れを声高に叫ぶのは軍人の役割ではないとい  
う言葉は強く印象に残った。規律がしっかり  
していて大変感動しました。自国を守るとい  
う意識が強く尊敬に値する人達でした(慶  
応)」などであった。

彼等は、離校する時最後の瞬間まで写真な  
ど撮って防大生と離れ難く、パスが発進し自  
然に防大生が「帽フレ(帽子を振る挨拶)」  
の動作をする熱いまなざしで素晴らしいと  
いつていた。パスの中で「本日の研修につ  
いて勉強になった人は？」と尋ねると、全員が  
手を上げ、中には両手を上げる男子学生も数  
名いた。彼等は、「これからも防大、日米学  
生会議の交流を是非続けて欲しい。国  
際関係や安全保障に興味がある学生にとつ  
てこんなに刺激的な場はない」としていた。そ  
れらを聞きながら、彼等以上の優秀な学生は  
我が国に少ないだろうし、その学生が防大を  
高く評価してくれており、改めて防大の教育  
は素晴らしいと防大生とともに我々は自信を持  
つべきであると感じた。

研修後直ちに、日米学生会議実行委員長か  
ら6月19日付「今回の訪問では先生方より大  
変勉強になるお話を頂戴し、優秀な防衛大学  
校学生達と意見を交わすことができ参加者一  
同感謝の気持ち一杯です。今後とも日米学生  
会議との関わりを続けて欲しいです」という  
礼状を頂いた。

# 日米学生会議参加学生の

## 防大来校後の所感を読んで

学生隊学生長 4学年 水越 洋光

なお、防大では、この日米学生会議のメンバーとして2年前(平成10年度)に防大を研修した東京大学法学部4年学生の「私は、二年前、日米学生会議のメンバーとして防衛学を研修させて頂き大変感銘を受けたので、来年度大蔵省に入省することになったのですが、私と共に大蔵省に入るメンバーを連れて再度研修に行きたいのですが受け入れて頂きたい」という要望を受け、平成12年1月21日、東大・7、京大・1、一橋・1、早稲田・1、慶応・1、大阪・1の計12名の国家公務員試験一種採用試験合格、平成12年度大蔵省採用予定者の研修を実施した。日米学生会議と同じ内容を実施した後の所見は日米学生会議同様素晴らしいもので、例えば「自分にとって、本当にためになる勉強をさせて頂き感謝しています。これから国の仕事をして行く上で欠かせないファクターである軍事について勉強するきっかけとなりました。防大は大学生としての勉強、部活等をこなした上で、さらに自分の国について考える環境が整っており素晴らしい(慶応)」「防大生は毅然としていて感銘を受けた、特に、自分の意見をしっかりと持ってそれを表現できる点を尊敬する、非常に勉強になった。今後お互いに一生涯連携をとって行くべき(東大)」などであった。彼らは離校するとき「有意義であったので来年(今年)の大蔵省採用予定者にも必ず申し送るのでよろしく願います」といっていた。本年度も1月頃研修に来ると思われるが、彼ら以上に優秀な学生は我が国にいないであろうし、その学生が防大生を多大に評価してくれており、国家、防衛庁のためにもなり、この関係も大切にすべきと考えている。

防大の教育は、意識の高い学生から高く評価されつつあり、我が国は望ましい姿になりつつあるのではと感じています。

来校者の所感を読むと、例外なく、防大への来校を有意義であると答えている。何が「有意義だった」と感じさせたのか考えてみる。

まず一つの要因として、イメージがあるだろう。我々にも同じことが言えるのだろうか、一般大学生達は防大生を「堅物」、「みんな同じ意見を持っている」というイメージを持っている。しかし、彼らの目に映った我々の姿は、「普通の人」、「親近感が持てた」というものであった。一般大学生と同じフィールドで話し合うことが出来たのは、紛れもなく防大教育のためであると言える。

次に、来校者は我々と視点が異なっていることに新鮮な印象を持ったと窺える。一般大学生はその特質からも、まだ、目が自分の回りにしか向いていないように感じる。しかし、防大生の目は世界とまでは言わないまでも、日本・国家に向いていると彼らの目には映ったようだ。同じ年のそれと同じ学生という身分で、これ程までに意識しているものに違いがあることに對して、彼らは我々に對し新鮮な印象を持ったのではないか。

三点目として、一般大学生も程度の差はあるにせよ、国防・防衛問題に関心があるという点だ。一般大学では教育の機会がほとんど無いにもかかわらず、防大では教官も熱意を持って教育し、学生も関心を持って国防・防衛問題を学んでいる。その中に一般大学生が入り込んだことで、眠らされていた「関心」が蘇ってきたのだと考える。

一般大学生の目には、以上のように我々に映り、「また、このような機会を是非提供して欲しい。」

「もつと多くの人に、防大を開放すべきだ」、「もつと多くの防大生と話をしたい。」という所感が出てきたのではないか。

続いて、防大生の所感を読んでみて感じたことを述べる。防大生も、この懇談を非常に有意義であったと述べている。それはなぜかを考察してみる。

まず、物事を観察する際には、いろいろな切り口が存在する。しかし、防大という閉鎖社会で生活することで、知らず知らずのうちに視界が狭くなってしまっているのではないか。この懇談は、我々に色々なものの見方があるのだということ認識させたと思う。また、4学年ということもあり、防大生として凝り固まった考え方を再考する良いチャンスになったのだと思う。

次に、この閉鎖された空間で生活していると疎外感を持ってしまいがちだが、来校した多くの一般大学生が防大に対して大変強い関心を持ってくれたことにより、非常に励みになったと思われる。

また、今回は日本でもトップレベルの優秀な学生が来校されるということで、引け目を感じていた学生も少なからずいたようであるが、議論をしてみても対等に話し合えたことで、防大生として非常に自信が持てたようであった。

更に、防大生は受け身の生活をしていることを感じ取った学生がいたことも大きな成果

と言えるだろう。なぜならば、我々は規則の中で、その規則に安易に頼って生活している面がある。一般大学生は、自分のすべきことを、自分で見つけて積極的に行動しなければならぬからである。

このように、来校者だけでなく、防大生にとっても非常に良い経験となったことは確かなのである。この貴重な機会を今後も断ち切ることなく、続けていかなければならないと、参加学生は感じていると私は受け取った。





第6回  
国際防衛学  
セミナーについて

現代士官学校に  
おける統率教育

26期 坂野 予彦

はじめに

「防衛学教育の充実・発展及び参加国とわが国との安全保障に関わる相互理解並びに相互啓蒙」を目的とし、平成12年7月11日（火）から20日（木）までの間、アジア・太平洋地域14カ国代表者の参加を得て、第6回国際防衛学セミナーを実施しました。本セミナーは期間を前・後段に区分し、前段に研究会、後段に研修等を行いました。

今回のセミナーは、統率・戦史教育室長が実行部会長としてセミナー全般の計画・実施を担当し、私は企画係として参加いたしました。本稿では、企画係から見た第6回セミナーの概要を紹介したいと思います。

1. 実施の概要

本セミナーには、招待国14カ国全てからの代表各1名とシンガポールのオブザーバー1名、並びに、日本から他大学教授等2名及び防衛大学校教授等13名の、計15カ国30名の参加を得て行われました。

前段の研究会においてはメインテーマを「現代士官学校における統率教育」、サブテ

マを「リーダーシップ教育の意義・重要性」「リーダーシップ教育の現状と問題点」及び「将来のリーダーシップ教育のあり方」とし、現代の士官候補生を取り巻く社会環境等の変革が世界規模で急速に進む中、士官候補生に対してリーダーシップ教育をどのように行うべきかについて発表・討議を行い、それぞれ国の士官候補生教育の充実に役立つ意見の交換を行うとともに、参加各国の相互理解を促進することができました。

また、後段の研修等においては、海上自衛隊幹部候補生学校等及び広島・東京・横須賀地区の史跡を研修し、防衛大学校卒業後の幹部候補生教育の状況及び日本の伝統について理解を深めることができたと思います。

2. 研究会の概要

(1) 全般

研究会は、7月12日（水）から15日（土）の4日間にわたり、基調講演及び2コセッションに区分して実施されました。はじめに基調講演において、「防衛大学校におけるリーダーシップ教育の現状・問題点」と、「将来のリーダーシップ教育の在り方」等について報告し、それに対する質疑応答を行いました。その後、第1セッションでは「リーダーシップ教育の意義及び教育の現状・問題点」について、また、第2セッションでは「将来のリーダーシップ教育の在り方」について焦点を絞り、発表・討議を行いました。

(2) 基調講演

防衛学教育者群の高橋1佐が「防衛大学校におけるリーダーシップ教育の意義及び現状」と「21世紀のリーダーシップ教育を取り巻く環境の変化とこれに必ずする教育」を内容とする基調講演を行い、防衛大学校における統率教育の現状と将来への対応を紹介し、じ

各国士官学校で養成目標としているリーダーシップのレベル

	小隊長 レベル	中隊長 レベル	大隊長 レベル	連隊長 レベル	団長 レベル	全 て
オーストラリア	○					
カナダ	○					
中国					○	
インド				○	○	
インドネシア	○					
マレーシア		○				
モンゴル					○	○
韓国					○	○
ロシア			○			
シンガポール	○	○	○			
タイ				○		
アメリカ	○					
ベトナム				○		
日本						○

フィリピンを除く

各国士官学校におけるリーダーシップ教育の核心となる資質

核心要素	規律心	使命感	真 勇	積極性	正 直
国 数	12	10	10	9	8

複数回答で回答数の多い要素を抜粋

後の討議における主要論点を提起しました。

「防衛大学校におけるリーダーシップ教育の意義及び現状」においては、特に教育上の課題として、宗教観が希薄とも言える日本の社会において、死生観を如何にして確立することができるか、また、自衛官として何を忠誠の対象とすべきかが問題点として挙げられ、参加者の問題意識を喚起しました。

「21世紀のリーダーシップ教育を取り巻く環境の変化とこれに必ずする教育」においては、国際社会の変化、軍事力を構成する人的資源の質的・量的変化（現代青年の価値観の多様化、女性兵士の増加など）並びに軍事におけるハイテク化と高度情報化が統率教育に及ぼす影響とこれへの対応を紹介し、その後の各国の発表においても、これらに関する多くの

意見が出されました。

(3) 第1セッション「リーダーシップ教育の意義、及び教育の現状・問題点」について

マレーシア、韓国、ロシア、モンゴル、シンガポール、フィリピン、ベトナム、中国及びオーストラリア（発表順）の各国代表が発表を行い、各国の歴史と伝統に基づいた統率教育の現状が紹介されました。

教育の意義において、各国士官候補生教育で養成目標としているリーダーのレベルの捉え方には「小隊長レベル」から「旅団長以上のレベル」まで幅広く、また、リーダーと軍隊の指揮官の相違が指摘される等、リーダーシップ教育の意義に対する考え方については

各国とも特色がありました。しかしながら、リーダーシップ教育の核心となる資質についての認識は概ね一致していました。また、教育の現状・問題点については、文化の相違、世代間の相違や価値観の多様化等、現代社会が多様化する現状を容認する一方で、教育においては本来の原点を認識する必要性や、軍事における革命（RMA）、国際化の進展などの環境は変化してもリーダーシップには不変の価値が存在することを指摘する意見が出されました。

リーダーシップ教育において、各国は理論教育と実践教育の両方に各種施策を講じ、真剣に取り組んでいるが、その中から一端を紹介します。

統率の実践教育において、学生の日常生活は重要な役割を果たしています。このため、各国とも軍隊組織に準拠した学生隊制度を取り、上級生による下級生の指揮や指導・助言の機会を与えて統率能力の向上を図っているのが通例です。しかし、オーストラリア代表は、能力・人格ともに未完成な学生に過大な権限を行使させることの問題点を指摘するとともに、オーストラリア防衛大学においては、2年前から学生隊制度を廃止し、全ての士官候補生は同等であり、候補生間に階層を設けず、指導教官が直接学生指導を行っている現状を紹介しました。これに対して、各国から上級生に対してどのように統率実践の機会を与えるのかなどの質問が出されました。

これに対し、オーストラリアの代表者は学生隊制度に代わるものとして、小隊規模（約30名）のリーダーとして必要な資質・識能の修得を教育目標として、士官候補生を鍛錬するため70コ状況以上のリーダーシップの実践機会を設定している状況を紹介します。

また、学生居室の構成人員については下段の表に示す様な編成をとり、居室の人員構成については、民族の構成、多言語国等により各

国の特性ある構成となっています。

(4) 第2セッション「将来のリーダーシップ教育の在り方」について

インド、タイ、米国、インドネシア及びカナダ（発表順）の各国代表が発表を行った。各国とも現代の統率教育を取り巻く環境の変化が様々な側面から捉えられていました。

特に、冷戦終結後軍隊の任務が拡大された結果、将校にこれまでと異なる能力が要求され、伝統的な統率教育に代わる新しい統率教育の方法の導入の必要性が確認されるとともに、個人指向の強い現代青年を集団の統制の中に適用させ、さらに自立したリーダーに成

長させるための教育の必要性が指摘されました。

女性兵士の比率の高い国においては、「女性兵士の強化に貢献している。」、又は、「人口構成上50%を占める女性に平等な地位を与えることは必要」との認識の下、今後さらに女性兵士に門戸を開放することを予定しているとの意見がありました。女性兵士の比率が低い国を含め、女性兵士の増加が統率教育へ及ぼす影響についても関心が集まり、影響を大きいと認識している国9カ国、影響が少ないと認識している国5カ国、無回答1カ国でした。

(5) 総括討議及びまとめ

環境の急速な変化と価値観の多様化に対応

学生居室の構成人員

人員数	1人	2人	3~4人	~10人	30人	30人~
国数	4	*4	*5	1	3	1

\*：米国、韓国は学年により異なる。

学生居室の学年構成

学年構成	同学年構成	各学年混成	その他
国数	9	1	1

オーストラリア、カナダ、中国、インド：無回答

各国軍隊において女性軍人の人数が全体に占める割合

割合	1%未満	1~10%	10%以上
国	インド インドネシア 韓国 シンガポール *タイ(0%)	中国 マレーシア 日本	オーストラリア カナダ フィリピン 米国

\*タイは今後も女性軍人の採用は予定されていない。モンゴル、シア及びベトナムは無回答

するため「リーダーシップの向上」のため、教官の能力向上や大学教育における人文社会学・自然科学・工学分野を総合的に教育する必要性などが議論され、特に、カナダや米国において、近年コアカリキュラムとして大幅に総合的な教育が取り入れられるという注目すべき傾向が見られました。

3. 現地研修等

海上自衛隊幹部候補生学校においては、防衛大学校における教育訓練と幹部候補生学校における教育訓練の連携について実地に研修することができたとともに日本帝国海軍以来の伝統について研修し、理解を得ることができました。

また、広島・東京・横須賀地区の史跡等を研修することにより、日本の歴史と文化に対する理解を得ることができたと思います。

おわりに

今回は、テーマが5回で一巡したことから第2期の初年度（統率）に当たり、従来の包括テーマである「21世紀に求められる士官像」から焦点を「現代士官学校における防衛学教育」とし、メインテーマを「現代における士官学校の統率教育」とし研究等が行われました。

各国の士官候補生に対する統率教育の在り方において、多くの共通点がある反面、各国の国情、文化等の相違に由来する幾つかの相違点についての理解を得ることができました。また、今後の統率教育における問題点は各国の国情、各学校の目的及び置かれている状況により差異はあるものの、大きな方向については、各国とも共通の認識を持っていることを確認できたことは有意義であったと思います。

平成12年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

(12. 11. 21現在)

校友会名	成績	部員数		校友会名	成績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援リーダー部 短艇委員会	開校記念祭リーダー公開 全日本カッター競技大会 男女優勝 関東地区新人戦 優勝	10 72	(9)	銃剣道部	全日本優勝大会・全国寺井大会 男子 大学生の部3位 全日本学生選手権大会 女子銃剣道及び短剣道団体 優勝	38	4
バスケットボール部	男子 秋季関東リーグ戦 5部3位 (Aブロック優勝) 女子 春季神奈川リーグ戦 2部7位	54	11	グライダー部	全日本新人競技会 競技中 久住山岳滑翔大会 女子準優勝 2年内藤	22	4
柔道部	神奈川県学生春季大会 団体3位	36	2	ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ戦 9部4位	28	
ラグビー部	秋季関東大学リーグ戦3部 6戦1勝5敗	104		ボクシング部	関東大学トーナメント ライト級優勝 3年水野 バンタム級優勝 3年渡邊	45	1
サッカー部	神奈川県リーグ戦 1部4位	60		レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部5位	34	
剣道部	関東理工系選手権大会 ベスト8	46	5	ボート部	東日本大学選手権大会 8位	25	
空手道部	全国国立選手権大会 優勝 春季関東リーグ戦 1部昇格	52	2	フィールドホッケー部	男子 秋季関東学生リーグ戦 1部6位 女子 秋季関東学生リーグ戦 3部昇格	35	18
バレーボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部2位 女子 秋季関東リーグ戦 9部昇格	26	13	ワンダーフォーゲル部	奥多摩、芦ノ湖、立山、大雪山等 で活動	17	
卓球部	春季関東学生リーグ戦 4部昇格	14	1	パラシュート部	日本選手権大会 団体4位 個人Jr.の部 優勝3年種橋 個人女子の部 優勝2年上田	13	3
陸上競技部	関東理工系学生競技大会 男子団体優勝 女子団体準優勝	59	5	準硬式野球部	神奈川7大学リーグ戦 3位	43	
硬式庭球部	男子 関東理工科リーグ戦 6部3位 女子 関東理工科リーグ戦 9部2位	46	9	合気道部	全日本学生演武会出場	68	
硬式野球部	神奈川リーグ戦 (春・秋) 2部優勝	35		体操部	東日本学生グループ選手権大会 団体6位	37	6
射撃部	秋季関東学生ライフル選手権大会 3部1位	22	3	弓道部	秋季南関東リーグ戦 男子 2部2位 女子 2部4位	40	9
山岳部	北海道利尻岳、谷川岳、南北アル プス等登山	12	1	少林寺拳法部	全日本学生大会 団体演武3位	36	3
水泳(競泳)部	東部国立大会、 男子9位 女子6位	39	5	フェンシング部	関東学生選手権大会 フルーレ 4部3位、 サーブル及びエペ 3部3位	35	
水泳(水球)部	関東学生リーグ戦 2部5位	22		ウェイトリフティング部	神奈川県社会人選手権大会 62kg級優勝 3年甘利、 77kg級優勝 3年加治屋 85kg級優勝 3年豊釜	25	1
ハンドボール部	秋季関東学生リーグ戦 5部4位	21		相撲部	東日本学生選手権大会 Bリーグ昇格(Cリーグ準優勝)	21	
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 1部Aブロック7位	102		自動車部	全関東学生ダートトライアル選手 権大会 団体10位	16	
ヨット(小型)部	関東学生選手権秋季大会 470級11位 スナイプ級9位	14	2	バドミントン部	秋季関東大学選手権大会 男子 5部B準優勝 女子 4部昇格	19	5
ヨット(クルーザー)部	関東フリートレース 8位 イタリア海軍兵学校・リボルノ市 共催国際レース 総合30位 士官候補生の部8位	23		居合道部	自衛隊全国大会 団体準優勝	16	4
				吹奏学部	横須賀港祭り、定期演奏会	20	9
				儀仗隊	自衛隊音楽祭り	45	5

# 第4回 期別対抗ゴルフ大会

10期 田尻 洋介

恒例のゴルフ大会が、平成12年10月23日(月)に千葉カントリー・川間コースで開催された。今年から、1期生から10期生までの参加となり、阿部博男同窓会会長をはじめとする約100名の選手による大会となった。

当日は生憎の雨のため、最終ホールではボールも見えない悪コンディションであったが、各選手は奮戦し、普段の練習の成果を十分に発揮して競技を終了した。競技は例年通り団体戦で、グロスの部とネットの部(新ペリア方式)の2部門で争われた。各期10名の選手の内、



グロスの部団体優勝 4期生チーム



ネットの部団体優勝 10期生チーム

上位7名の合計スコアで2部門の順位を決定した結果は次の通り。

### グロスの部

優勝 4期生チーム 平均86・6  
準優勝 6期生チーム 平均87・1

### ネットの部

優勝 10期生チーム 平均73・8  
準優勝 9期生チーム 平均74・1

表彰式の後、懇親会を実施した。来年は11期生を迎えて、楽しく、賑やかに開催することを誓い合いゴルフ場を後にした。

▶松崎同窓会副会長とシニアリーグで優勝した2期生チーム



▶レギュラーリーグで優勝した10期生チーム



# 第3回 期別対抗テニス大会

10期 吉田 顯彦

第3回同窓会テニス大会が、6月4日快晴の母校防大のテニスコートで開催された。大会は、開会式に先立ち現役防大生とOBとのエキシビジョン・マッチが実施され、和気調々のうちに現役とOBとの絆を強めた。九時二十分から開会式が行われ、大会会長(松崎充宏同窓会副会長)、金井喜美雄防大副校長(4期選手)の挨拶、井川 宏競技運営委員長(2期選手)の競技要領説明の後、昨年2連覇を達成した7期生から優勝杯が返還され、大会が開始された。

選手数の増加(10期生の参加)に伴い昨年と試合要領を一部変更し、1期〜10期の10個チーム(各チーム、ダブルス5個組)を1期〜4期のシニアリーグと5期〜10期のレギュラーリーグに区分して、シニアリーグは4個チームによるリーグ戦を、レギュラーリーグはAブロック(3個チーム)、Bブロック(3個チーム)毎に予選リーグ戦を行い、両ブロックの1位、2位、3位同士による順位決定戦を行うこととされた。この結果、シニアリーグの優勝は2期、レギュラーリーグの優勝は初参加の10期となった。熱戦間、西原 正防大校長の視察・激励を頂いた。試合終了後、学生会館で実施

された表彰式・懇親会は、各期選手及び家族など130名が参加し、龍岡資臣競技運営委員(7期選手)の成績発表、松崎大副会長からの優勝杯授与に引き続き、阿部順治大会副会長代理(1期選手)の音頭による乾杯をもって懇親会が開始された。表彰式・懇親会には金井副校長、八尾 隆硬式庭球部監督及び本大会のため休日を返上して支援に当たって呉れた学生諸君を交え和やかな雰囲気の中に反省会が行われた。本大会準備・実施の原動力となった同窓会小原台事務局の諸官はじめ、賀好泰文庭球部顧問(37期)に感謝したい。

### シニアリーグ

1位 2期生 3戦全勝  
2位 4期生 2勝1敗  
3位 3期生 1勝2敗  
4位 1期生 3戦全敗

### レギュラーリーグ

1位 10期生 3戦全勝  
2位 7期生 2勝1敗  
3位 9期生 2勝1敗  
4位 6期生 1勝2敗  
5位 8期生 1勝2敗  
6位 5期生 3戦全敗

注：勝数が同じ場合は古い期を上位とした。

# 第2回定期別対抗囲碁大会

## 3期生が圧勝

10期 若木 利博  
第2回囲碁大会は平成12年9月2日(土)、日本棋院会館において盛大に開催された。

当日は三伏炎暑の名残宜しく残暑厳しい一日であったが、1期生から今年初参加の10期生まで80名の選抜棋手が一同に会し、猛暑をもとめせず熱戦が繰り広げられた。

開始に先立ち阿部博男同窓会会長兼大会会長から、親睦交流の趣旨を体し、囲碁を一日楽しんで欲しいとの挨拶の後、高比康之競技委員長から競技実施上の注意があり、熱戦の火蓋が切って落とされた。

競技は事前に各期担当委員の参加により決定された対戦表に基づき、オール互い先、4回戦で実施された。各回戦終了と同時に各期担当委員が競技結果を持ち寄り、集計結果をその都度壇上のチャートに掲載しつつ、

緊迫した中で午前2回戦、昼食をはさみ午後2回戦の競技を予定通り円滑に終了した。



優勝した3期生チーム

### 成績表

	勝ち数					順位
	1回戦	2回戦	3回戦	4回戦	合計	
1期生	5	3	3	4	15	6
2期生	2	3	4	3	12	8
3期生	7	8	5	4	24	1
4期生	4	5	5	5	19	2
5期生	4	3	4	4	15	6
6期生	5	5	5	4	19	2
7期生	3	4	6	6	19	2
8期生	4	3	0	4	11	9
9期生	4	3	5	4	16	5
10期生	2	3	3	2	10	10

表彰式・懇親会に向け会場整理中に総合結果が出、直ちに表彰式に移った。優勝した3期生の代表者に対し阿部会長から優勝カップが授与され、4戦全勝の高比棋手(1期)、三石棋手(2期)、宮本・倉田棋手(3期)、清水・橋本棋手(4期)、大野・川上棋手(5期)、壺内・佐古井棋手(6期)、松井棋手(7期)、新美棋手(9期)、佐々木棋手(10期)の紹介があり全員で健闘を称えた。結果は準優勝4・6・7期生(同率)、以下9期生、1・5期生、2期生、8期生、初参加の10期生の順位となった。表彰式後高比競技委員長の乾杯の音頭で懇親会に入り記念撮影を交え和やかな歓談の内に本大会は成功裏に終了した。期待した戦果を得られず次年度に賭ける選手も見受けられた。

# 校内カッター競技への

## OB艇(黒部会)チームの参加

黒部会事務局長 7期 牧山 元

防大短艇委員会OBからなる黒部会A、Bチーム2艇(オープン参加)は、4月28日走水沖において、昨年同様女子2学年2チームと新たに来る5月27日に行われる全日本大学カッター・レースに参加予定の女子チームの合計5艇で順位を競い合うことになりました。

当日は五月晴れのもと、風も南よりの風3m/sと弱く、絶好のレース日和でした。

競技に先立ち小西前同窓会会長から激励と身の程を弁えて無理しないようにとの

の暖かい訓示を頂きました。また、多忙なスケジュールのなか長谷川自衛艦隊司令官も応援に馳せ参じてくれました。スタート直後、女子の全日本参加チームが頭一つリードする形となりましたが、練習の甲斐もあり(我々は4月8日から試合当日までの土日6回を練習にあて競技に臨みました)、その後はOB2艇が力強い水とりと一糸乱れぬオール捌きにより徐々に他艇を引き離し始め昨年同様OB艇の圧勝に終わりました。因みに成績は優勝Bチーム8艇身遅れてAチーム更に20艇身遅れて選抜チーム、2学年チームの順でした。

競技終了後、走水荘にて祝勝/懇親/慰労を兼ねて昼食会を盛大に実施した後、今後の黒部会の発展と参会者の御健勝を祈念しつつ解散しました。

Aチーム			Bチーム		
艇指揮	7期	向井 正興	艇指揮	7期	牧山 元
艇長	13期	阿部 洋継	艇長	14期	水田 寛之
艇員	42期	森 慶太	艇員	39期	佐々木 司
	41期	森田 健		39期	古賀 肇
	40期	南里 英一		37期	吉田 久哉
	39期	坂井 智哉		37期	岡井 哉
	39期	村田 俊郎		34期	湯浅 純
	37期	国沢 保		34期	中村 鋭介
	37期	富岡 直明		29期	触井園 淳
	30期	石原 浩二		21期	吉田 明
	28期	井上 善文		19期	松尾 信一
	21期	豊沢 幸徳		16期	阪上 廣一
17期	高橋 英雄	16期	西田 利雄		
15期	峰岡偉津夫	15期	正田 勉		

なお、31期 川崎 英洋、24期 石塚 達也、18期 西岡 篤の3名は練習には参加されましたが、当日は業務の都合がつかず残念ながら参加出来ませんでした。

# 顕彰碑献花式

9期 戸島 勝彦

快晴に恵まれた十一月四日(土)一三三〇から一四三〇の間、図書館脇の顕彰碑前において、開校祭初日のメイン行事として、防衛大学校同窓会による「顕彰碑献花式」が、本年度顕彰者「余語圭太」同窓生のご両親のご参列を得て厳粛に執り行われました。

余語同窓生は、愛知県出身、防衛大学校第四十一期生として航空宇宙工学を専攻、平成九年三月、航空自衛隊に入隊、操縦要員教育課程に進まれましたが、本年三月二十二日に飛行訓練中に殉職されました。先ずもって、同君のご冥福をお祈り申し上げます。

さて、本年度の献花式には、学校当局から新たな陣容となられた西原防衛大学校長、金井副校長、田原幹事の三役をはじめ各学群長及び各学科長・教育室長等多くの皆様のご参列を賜りました。

一方、各期生会からは志摩第一期生会会長をはじめ、本年度ホームカミングデー該当期の五十君第二期生会会長等、各期生会代表者の参列を得ました。

式は、同窓会から執行者の阿部博男同窓会長及び川名事務局長等が参加し、野澤一等空佐(防衛学教育学群長)を実行委員長として執り行われましたが、特に、計画運営全般にわたり、小原台事務局の吉村二等海佐はじめ現役諸官の献身的な協力を得た事を記録にとどめたいものと存じます。

なお、本年度の式には、多くの一般参列の皆様からの献花をいただきました事、また、既顕彰の同窓生折戸征夫君のご遺族から、芳志が小原台事務局に託されました事を付記します。結びに、殉職同窓生を偲び、ここに祀られる八十七名の御霊のご冥福をお祈り申し上げます。

# 防大卒業留学生歓迎夕食会

9期 日高久萬男

例年の通り、開校祭を機会に海外から招聘された留学生OBを歓迎する同窓会長主催の夕食会が催された。

出席した留学生は、ワンロップ・ティンカオ中佐(航空29期)、チョイヤット・ティンカムシール中佐(航空30期)、アヌクーン・チャーンチャン中佐(海上33期)及びドーン・プラビーク大尉(陸上37期)で、いずれもタイ王国からの現役軍人である。

彼らは、10月29日来日し、防大表敬後、11月1日、2日と陸上自衛隊富士駐屯地及び航空自衛隊浜松基地を研修し、都内に戻った3日の夕刻、新宿三井ビル「三井倶楽部」での夕食会に参加した。

同窓会からは、阿部会長(空1期)、佐藤留学生連携委員長(陸4期)及び日高事業部長(空9期)と留学生OB同期の柳澤浩幸3佐(空29期)及び貞殿知彦3佐(海33期)が参加した。

会での話題は、小原台での思い出から、アジア更には世界の政治、軍事、経済、そして同窓会に対する期待及び現地での活動状況等に関し意見交換に及び尽きることがなかった。

留学生OBは、11月6日横須賀地方総監部を研修し、翌7日離日した。



阿部同窓会長を囲む留学生OB(前列)

# 防大同窓会 1 タイ王国支部の発足

4期 佐藤 幸憲

防大同窓会タイ王国支部(タイ王国防大同窓会)が昨年のシンガポール支部に続き、2つ目の海外支部として、8月5日バンコックで発足した。

発足行事は、バンコック市内アマリア・アトリウムホテルで行われ、タイ卒業生88名中、演習等で不在の者を除き国内各地から卒業生52名と一部の夫人子息を含め80名が出席した。

本部からは、阿部会長、杉本事務局副長、佐藤留學生連携委員長が、大使館から立花防衛駐在官が参加した。行事は、初代支部長チョンチェン・ブラスシルピン氏(6期陸上)の挨拶、阿部会長の祝辞等の後、祝賀会食に移り海軍音楽隊の演奏支援のなか、会員の現況報告・家族紹介が続けられ和やかに進められた。この中でチョンチェン氏は第1回留學生としての苦労話や受けた暖かい心遣いの思い出に触れると共に、チョンチェン氏をはじめ4名以上の卒業生が日本女性と結婚していることも話題となった。また、会長のスピーチ及び杉本副長の準備した資料により、防大及び同窓会の現況と50周年記念行事の紹介も行われた。

本行事は、海軍卒業生担当で準備し実施されたが、海軍現役先任で副支部長のタナラット海軍大佐(23期海上)が陸海空卒業生をうまくまとめチョンチェン氏を盛り立て、成功させていた。終わりは、防大生歌及びタイ予科士官学校マーチの斉唱で盛り上げ次の再会を誓って終了した。今後、タイ卒業生相互及び日本タイ両卒

業生間の交流が一層進むものと期待される。翌日、会長はタイ最高司令部教育部長カセム中将を表敬懇談し、留學生制度につき相互理解を深めた。

現在、防大には本科22名、研究科7名、日本語課程5名合計34名のタイ留學生が在学しており毎年5〜6名が卒業・帰国し、同窓会員となることになる。

なお、この主要海外2コ支部の発足により卒業生の現況も逐次明確になったことによりフィリピン、マレーシア卒業生を含め卒業留學生名簿の発行も来年度計画されることとなった。



バンコックにおける支部発足式

# 2 ホーム・カミング・デーの実施

9期 日高 久萬男

本年3月19日、防衛大学校本科第44期生、理工学研究科第37期生及び総合安全保障研究科第2期生の卒業式に合わせ、本科第1期生のホーム・カミング・デー(HCD)が行われました。

HCDは、卒業後の適切な時期に想いでの小原台を訪ね、母校の卒業式典に陪列し、新たな卒業生の前途を祝福・応援すると共に現在の大学校諸施設を見学し

つつ、現役学生、指導官及び教授等との相互の交流を通して同窓会と母校との絆を強化する、また、併せて、同期生とその家族の健康を祝い相互親睦を図る趣旨で計画されたものです。このHCDは、元々、平成11年3月10日、同窓会総会で戴いた当時の松本中学校長の講演の中で同窓会へ提案されたものです。

この実行にあたって、当初、入校式(4月)、開校祭(11月)卒業式(3月)及び別途設けた時期の数案が在りましたが、松本前校長の積極的な御支援と御理解を得て、区切りとして意義在る世紀末の平成12年の卒業式時、概ね65歳に到達する第1期生から始まりました。以降、期の順番で原則として毎年実施するものです。

HCDの主要な内容は、前述の趣旨に則り、卒業式陪列、観閲式陪列、校内研修及び懇親会です。ご承知の通り、卒業式は官邸、内局はもとより、在日外国大使館或いは米軍関係、そして卒業生家族と大勢の来校者で大学校当局は、その対応に暇なき状況ですが、防衛学教育学群長を頭とする同窓会小原台事務局の各員がHCDの計画、実行にあたって、くれました。

第1期生の参加者は全国から133名で、令夫人83名と9名のお子たちを入れ合計255名が1日、台上で懇親を深められました。中には、部活、所属学生班或いは小隊で数日前から集合し、HCD予行を催された方々もありました。後日、参加者から大きな評価を得ましたが、その評価の大部分は、小原台事務局の積極的行動に負っています。尚、同窓会としては、参加者の午餐会経費支援の名目で所要の予算補助と参加記念品を準備させて頂いています。次回のHCDの順番である第2期生にあつては、年度当初から期生会役員を中心に準備を進められています。読者各位の順番をお待ち下さい。

### 中期事業

## 3

### 東海地区に 同窓会誕生

東海地区支部会長 1期 江戸 満

平成十四年には、防大創立五十周年の節目を迎えます。この半世紀に亘る年月の経過と共に退職者が各地域に居住し、今後その人数は逐年増加して行きます。

このような背景のもとに平成八年に同窓会規則が改正され地域・地区支部の設置が定められた状況を踏まえ、東海地区においても同窓会設立の機運が高まり、平成十一年九月に各期有志で意見交換を実施、以後準備委員会を発足させて一年あまり数回の検討を重ねて、去る十二月三日各期の発起人(発起人代表国枝氏(#1))の尽力により、めでたく愛知・岐阜・三重3県に亘る東海地区支部が誕生しました。会員は、退職会員約300名、現職会員約400名、合わせて700名の大所帯であります。防大同窓会長阿部氏(#1)、関西地区同窓会長牧氏(#2)、防大副校長金井氏(#4)を招き、OB 90名・現職40名で盛大な設立総会と懇親会を開催しました。一期から四十三期までの面々が一堂に集い、思いを語り、旧交を温める模

懇親会



様は防大キャンパスの姿そのものでした。今後は当同窓会を縦糸とし、同期生会や中部小原台クラブや親交のあるグループを横糸として、相俟って東海地区同窓の味を増し、素敵な色彩を生み出して行きたいと念願しています。

同窓会未結成の地区に早期に同窓会が誕生して全国に同窓会ネットワークが構築され、本部と地域・地区とが意見を交換しつづ必要に応じて組織的な活動ができる体制を築く施策が期待されます。

同窓生各位のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。

#### 「東海地区支部事務局」

〒511-0103 三重県桑名郡多度町戸津508-24

仁木一男(#9)

#### 連絡先

平日・昼間 TEL 052-443-2071

休日・夜間 TEL 0594-48-2004

niki@nagoya-denki.co.jp

### 中期事業

## 4 同窓会ホーム・ページの開設

9期 日高 久萬男

従来から同窓会会員に対する、同窓会活動状況の紹介等は、代議員会、総会及び同窓会広報誌「小原台だより」を通じて為されてきました。しかも、それは、同窓会会則等による年一回の義務的のものでした。しかし、IT化社会の真つ只中にある現今においては、これらの手段では内容が限定されるとともに適時性が薄く、また紹介事項等が会員に広く伝達されたいとは言い難い面があり、各種不満のつのもろのと思われま

この懸案の解消を図るべく、同窓会本部は、「中期事業計画」の一環として、昨年、本部にEメール(bodai@nifty.com又はZAN24404@nifty.com)を設置しました。これに引き続き、本年は、同窓会ホーム・ページを開設すべく検討を重ねてきました。現在の同窓会財政状況及び事務局の技術的状況から、独自のホーム・ページ開設は困難と判断し、代替策として防衛大学校webmasterの好意で大学校が管理するコンピューター・システムにある同大学校ホーム・ページに間借りの「同窓会の窓」(<http://www.nda.ac.jp/cc/alumni/ndaalumniopen.html>)を設けてもらうことにしました。

内容としては、次のような項目を掲載する予定です。

- 1 同窓会長挨拶
- 2 同窓会規則並びに地域及び海外等支部組織図
- 3 総務関係  
総会、理事会、代議員会等の状況  
事務局の状況
- 4 事業関係  
各種交流会開催状況  
ホーム・カミング・デー  
校友会及び期成会助成状況  
その他
- 5 尚、将来は、支部及び各期生会便り或いは現役学生からの質問欄等同窓会活動の一層の活性化に一役果たしたいと考えています。

防衛大学校URLは、<http://www.nda.ac.jp/index-j.html>です。是非、アクセスしてみ下さい。勿論、大学校は、防衛庁(<http://www.jda.go.jp/>)或いは各自衛隊ホーム・ページ(<http://www.jda.go.jp/gsd/>)同MSDF/同jsdf/等からリンクされています。

# 同窓生

## アラカルト

### よこずき三昧

6期(海) 熊野 梁一

投稿依頼の電話が掛かってきたとき、やはり私は変り者なのだと自覚しました。でないに投稿の依頼などありようがないからです。再就職の会社を三年で辞して、「青春への回帰と頑張らない」をモットーにし、焼き物の道に入ったのは二年半前です。陶芸仲間が別れ際に「じやー頑張らないで下さい」と言ってくれます。

さて、私の借家は長崎県波佐見町の山奥の中尾山と言い、波佐見焼き発祥の地にあります。四百年前に朝鮮の役で連れてこられた陶工が磁土を発見し、以降、食器・生活雑器の生産地として発展してきました。佐賀県の有田とは車で十分のところですが、ここ中尾山には町営の陶芸修業場があり多様な人々が集まってきますので、私のようなビギナーには格好の場所です。これとは別に、中尾山から十キロ離れた同じ波佐見町に古い家を借り小さなガス窯を据えて工房としています。

(このような事で紙面を埋めても面白くはないでしょうから、断片的ですがエ

ピソードを紹介しましょう。)

### 宝物

まだ窯焚きを始めた頃、年配の男が挨拶もなしに我が工房に入ってきて来て、窯から出したばかりの作品をジロジロと見始めました。机の上にはテストピースが五十個くらい並んでいました。「どなたですか」と聞くと「△△だ」と言っただけでかなりの沈黙が続く、やがて彼は「みんな初めは色々試し焼きをするが、こんな事をやっても何もならない」と口火を切り、焼き物の講義にも似た果てしない自慢話が続きました。後で知ったのですが、彼は中尾山の極めて不人気な陶芸家でした。自衛隊を退職したド素人が焼き物を始めたことを知り、巨匠たることを示さんかためのパフォーマンスだったのでしょうか。今ではテストピースも三百個を越え、私の宝物となっています。…そ



こで一句

「クソジジイ 宝の山にケチをつけ」

### たくまじさ

秋は猟のシーズンで男共は競って猪や兎を捕っています。借家のすぐ傍に、獲物を解体する小屋があり、仕事を終えた連中が夜に獲物を担いで集まって来ますが、時として紅一点を見掛けることがあります。陶芸修行中の若い女性です。彼女は猪を恐れることもなく解体を手伝っています。男共は喜々として女性を励ましています。解体が終わると焼肉の酒宴が恒例となっていて、この女性に加わった時は一段と盛り上がるようです。牡の急所を丁寧に焼いて、彼女に食べさせるのが男共の極め付きの楽しみだからです。当の女性はと言うと平然とこれを口に頬張り、男共のとても上品とは言い難い話を聞きつつ胃袋を満たしています。これって今はやりのセクハラではないのかな。しかし待てよ、男共の前で牡の急所を食いちぎっている彼女は、男共に対するセクハラではないのかな。どっちもどっちだ。このような経験を重ねて、遅い陶芸家が育つのでしょうか。

(山を幾つも越えて帰った男達の車が谷に転げ落ちて……バチが当たったのか)

### ステータス

ゴールデンウィークは、波佐見では陶器まつり、有田では陶器市が開かれるお祭りです。生来のサボリ癖を直すため、

今回の陶器まつりに出店しました。波佐見商工会に申し込みに行きましたら、作品の種類と数をチェックに来て、数が少ないと即座に言われましたので、ガラクタをせっせと作り数は揃えました。私の作品はすべて、手捻りと言って手で作っています。隣に店を張っていた陶芸家の奥さんが度々のぞきに来て、手捻りをこんなに安く売るのでかと再三牽制していききました。世の中不況でも陶芸家はステータスを捨てる訳にはいかないようです。私は単なる土いじりに過ぎませんので、まことに失礼。ちなみに工房名は「よこずき三昧」です。パロディーが結構受けました。



最後になりましたが、何かを始める時は何かを犠牲にしなければならぬという事です。私は、妻に心配を掛け、老後を犠牲にしているのでしょうか。





## 1期生会

◆竹井 溥

### 1、感動のホームカミングデー

第一回の「ホームカミングデー」の行事が3月19日第44期生の卒業式の日に行われた。此の行事は松本学校長の御発案によるもので、卒業式にOBを招き伝統の偉大さをお互いに認識しあい、その絆をしっかりと受け継いで行くという趣旨から始められた制度であり、その一回目として私共1期生が招待された。

この日は我々にとっても一生一度の晴れ舞台というわけで、北は北海道から南は沖縄まで約半数にあたる百五十三名の同期生が集い、更に石山晃君、平山救馬君、湯浅強君の三末亡人も特別参加され、同伴のご夫人方を入れると、実に二百五十五名が参集するという大盛況となった。

先ずは控室で、久し振りの再会に各所で歓声が上がった。中には卒業以来の人、名前が思い出せない人などもおり、43年の時の流れを感じた。

午前十時から場所を総合体育館に移

し、第44期生の卒業式に臨んだ。本科三百八十九名、研究科八十五名に対する卒業証書、学位授与の後、松本学校長、故小淵首相、瓦防衛庁長官、来賓の上坂冬子氏の祝辞があり、最後は卒業式の名物で、我々も是非やってみたかった卒業生の帽子投げで終了した。

次いで陸海空の制服に着替えた卒業生の宣誓式と観閲式に列席した。各幕僚長への宣誓は自衛官として生きる決意の誓詞であり、思わず身が引き締まった昔を思い出す。曇天の中、陸海空のOBパイロットによる各種航空機の祝賀飛行があり、在校生の観閲行進が始まった。儀礼刀は紺の制服によくマッチし、防大生でしか味わえない凛々しさを感じ、又女性小隊長の甲高い号令が新鮮だった。

午後二時から学生会館で、我々だけの懇親会が開かれた。準備された食事は余り褒められたものではなかったが、我々の再会の熱気がそれを補って余りあった。久里浜の仮校舎から始まり、小原台までの四年間の防大生活が、走馬燈のように頭の中を巡る。傍らでは若かりし頃、同じ官舎で過ごされたであろうご夫人方の話も弾んでいる。長いようで実は

アツという間に過ぎ去ってしまった現役時代、しかしその中で、各人それぞれの歴史を刻んで来たが、その原点がここ小原台にあった。けれどもそれを語り尽くすには、時は余りにも短すぎた。途中、松本学校長も見えられ、本会の趣旨を説明され、岡田一期生会長が答礼した。その後、一年の時の小隊編成で各々記念撮影をし、開校50周年記念日での再会を約して散会となった。

外に出ると、卒業生を送り出す人垣が校門に向けて長く延びていた。43年前我々が巣立った時、小原台特有の一陣の猛砂塵がまき起り、「風と共に去りぬ」と言われたことを思い出す。昔と違い各クラブの大きな旗が林立し、太鼓を鳴らしての派手な演出を横目で見ながら、足は自然と浦賀に向かった。昔はまさしく「けもの道」で雨が降ると草にしがみつきながら登ったものだが、今では階段には手すりがつき、道路は舗装され、麓は家々が軒を接し、標高が変わらない以外は往時を偲ばせるものは何もなかった。

小原台上は開校50周年に向け、現在建築ラッシュで、本館、人文館は取り払われ、新築工事に着工中、一足先に完成した給水塔兼時計台が、新しい歴史を刻みつつある。母校の発展する姿を頼もしく思い、興奮の一日の心地よい疲れを感じながら帰途についた。

### 2、将来のために

このホームカミングデーの行事は来年は2期生、再来年は3期生と受け継がれて行くという。我々はいわばそのテスト

ケースといつてよいであろう。将来よりよき伝統行事として残していくために、少しばかり所見を述べたい。先ず招待者としてのOBの年齢が偶然にも65才前後であったことは、真に当を得ていた。65才といえば、ほぼ第二の仕事も終わり、人生の折り合いもつき、お互いに利害関係もなく、丁度防大卒業時に似た横一線の心境になり得ること。そして体力、気力ともに、まだ十分余力を持っている時期であること等から、年齢的に非常に適切であったと思う。又イベントとして卒業式を選ばれたことも最良の選択で、この行事の趣旨からして、これ以外に考えられないであろう。ただ折角列席しているのだから、OBと卒業生との間で、何らかの形で触れ合いが欲しい。例えばOBからはなむけの言葉を送るとか、記念品を渡すとか、又は代表者が握手を交わすだけでもよいと思う。今後一連の卒業式行事の中で、考慮していたければ有り難い。

最後に懇親会食について申し上げたい。会食を我々だけの会として実施していただいたことは、正解であったと思う。もし卒業生の会食会に参加していたら、大混雑の中で満足に会話を交わす間もなく、あわただしいうちに終わってしまったであろう。それは別として、問題は懇親会食の中身である。先ず缶ビールや缶ジュースで乾杯をした。又お料理も、一生に一度しかないパーティのものとしては、かなり簡素な内容であった。

もう少し盛大な宴席に出来なかつたのであるか。この会が男性だけの、所謂気楽なスタ

ッグパーティーであったならば許せるであろうが、大半の者が夫人同伴で参加している正式な会食会である。この百人を越すご夫人方の中には我々が現役時代、各幕のトップ、各級最高指揮官、司令官等の夫人として、内外の豪華なパーティーに出席した経験をお持ちの方も多くおられた。このことからしても、パーティーがこの程度のものかと思われれることが、何としても恥ずかしく情けない。これを要するに、準備をされた方と我々の間の、この行事に対する思い入れの温度差にあると思う。

私は懇親会食は同窓会にまかせることなく、各期生会が主導で行うことがよいと思う。

即ち該当期は、その年の同期生会を、一生に一度、母校で行うと考えれば、会費を支払うことも当然であろうし、自分達なりの満足のいく会が開けるであろう。

やや次元の低い話になってしまったが、今後伝統行事として根付かせて行くための、一つの意見としてとらえていただきたい。第一回の行事として、同窓会の役員の方々は暗中模索しながら、良く準備して下さったと感謝している。これからは該当期の役員とよく細部調整され、この行事をより良い方向に発展させて行かれることを、切に願って止まない。

## 4期生会

◆会長 杉山 恭

ミレニアム、シドニー・オリンピック、米国大統領選挙等多彩な年を終え、新世

紀の幕開けである。我が四期生も小原台の土を踏んで四十五年になる。

昨年の四期生会は、恒例の同期生会、同窓会主催のゴルフ、囲碁、テニス大会への参加等も「業務計画」どおり実施し、また一年歳を経たと言うところが、率直な所感である。そんな中で、金井君の防大副校長就任は、大変嬉しいニュースでありました。また、隔年実施している同期生名簿発行の年でありましたが、勤務先欄の空白がめっきり多くなり、晴耕雨読、悠悠自適(?)組が増えた事は経年変化とは言え、厳粛な事実でありました。今回の名簿の大きな特徴は、EIMAILアドレス欄を新設した事です。長たらしいアドレスがあり枠をはみだすとか、ページ数が増えるとかの問題はありましたが、時代認識優先で踏み切ったもので

EIMAILに関連する話ですが、みなさんご承知のとおり、本年はIT革命の本番開始である。情報の多彩さと量、時間・速度・使い易さの優位性等から、社会活動の格段の飛躍、持続性のある経済成長をもたらすものとして、期待されるどころ大であります。さらに、「携帯」とのリンクによる「iモード」への展開も時間の問題でしょう。還暦を越えた我々も「今更、チャラチャラした事を」と言う主張もありますが、遅かれ早かれ、所詮は時代の流れについて行く事になるでしょう。十年を経ぬうちに、同窓会、同期生のメールネットが構成され、情報提供・交換、サークル活動等の神経中枢となると考えられます。インターネット時代に取り残された層を如何にするかと

言う「ギャップ」の問題が既に検討され始めている現在、善良にして知性高き存在であるべき我々は、年代層を牽引していくぐらいの気概が必要と思う次第です。かく言う小生も、インターネットはともかく、携帯を片手で扱うのは、とてもではない。自衛隊で鍛えた太い親指には、キーが小さ過ぎると内心こぼしながら、「しばらくは我慢」と心して「練成訓練」に励む所存です。

四期の諸兄も同期生名簿EIMAIL欄新設を契機に時代に対応した「モダンイズド・エイジ」を目指して頑張りましょう!

## 5期生会の皆様に

◆理事長 安岡 義純

5期生会の皆様には、新年を迎えますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、5期生会としては、千葉・根岸・横沢君を中心に陸・海・空それぞれで行う親睦会と、期生会として行うゴルフ・テニス・囲碁大会を通して親睦を図っておりますが、月日の経つのは速いもので、今年4年毎に開催する総会の年となりました。

昨年8月28日、総会に先立ち5期生役員会を開催し、(1)総会を今年の6月29日(金)に開催すること、(2)期生会規約(組織)の改正を提案することを決定いたしました。

新しい規約では、陸・海・空から各1名を選出し理事長と2名の副理事長に就

任することと監事2名を陸海空関係なく選出することは現在と同じですが、本部の業務運営(事務・会計・同窓会代議員)を担当する本部理事として陸・海・空から各3名を選出することと地区(北海道、東北、近畿、中部・北陸、中・四国、九州)担当理事各1名(関東地区は本部理事が兼任)を陸海空関係なく選出することを提案しています。

この案は、すでに、陸海空それぞれの期生会で説明されていますが、この新しい規約(案)について、要望等がありましたら、2月末までに、千葉(陸)、根岸(海)、安岡(空)千葉瑞圓(FAX:03-3269-1764)、根岸勝利(FAX:03-3269-1764)、根岸勝利(FAX:03-3269-1764)、安岡義純(FAX:0468-4415903、E-MAIL:yasuka@cc.nda.ac.jp)へ知らせていただきたいと思えます。皆さんからの意見をもとに3月末に開催する役員会で規約を再検討し、その検討結果を6月の総会で提案させていただきます予定にしています。

総会の案内は4月に発送の予定です。多くの皆さんの参加を期待しています。なお、新名簿を作成致しますので、案内の返書は早めにかつ確実にお願ひします。

## 6期生会

◆会長 西村 義明

六期生は、1962年3月17日に44名が小原台を卒業してから38年になります。この間に31名のクラスメートがあの世界に行きました。率にして6.4%です。生き残っている者達は、総員が還暦を過

きて、益々元気に円熟味を増し、仕事に興味にそしてボランテアにと、人生の第4コーナーを謳歌しています。

さて、クラスメートの活躍状況ですが、先生が偉いわけではありませんが、母校の防大教授には小暮敬二君をはじめ3名が現役で頑張っていますし、その他の大学にも7名が教授として活躍しております。また、作家稼業的なことをやっている者も柿谷勲夫君や茅原郁生君等5名もおります、その他時々、新聞、雑誌、テレビ等に顔を出す者は多数おります。その一方で、既に第2の人生を終えて年金生活に入り、悠々自適の毎日を送っている仲間もぼちぼちと出てきております。

期生会は毎年1回地域毎にやっています。北海道支部、東北支部、東海支部、関西支部、中・四国支部、九州支部はそれぞれ地域特性を生かした活動をやっておりますが、東京での期生会がやはり盛大です。今年も6月6日午後6時6分からグランドヒル市ヶ谷でやりましたが、135名(内19名夫人)集まり大変賑やかな同期会でした。その外、東京では、毎月6日に昼食会を市ヶ谷でやっており、毎回20名程度が顔を出します。

また、防大同窓会主催のクラス対抗競技でも六期生チームは強く、昨年はゴルフと囲碁で優勝し、特にゴルフは2連覇して、他のクラスから少し遠慮したらと、憎まれる程の強さです。今年も大いに活躍することでしょう。

## 7期生会

◆会長 — 伊藤 惇

“7”という数字の響きは悪くないし、偶々7期として育まれたことに秘かな幸運すら感じたものだ。だが、実際問題、世の中の制度なり規則なりは、大体5年間位の出来具合を見て、7年目位に反省や教訓を籠めて、より厳しく、より教育的に、より本格的になつて行く様だ。我々も、感覚的で恐縮だが、どうも入校以来その種の流れの悲哀を随所に感じたものだ。勿論それは、恨み節ばかりとは限らないが。

序でに、我々が入校、卒業、退官等の節目を迎える時期は、いつも社会全体が谷間に喘いでいる時で、どうも巡り合わせは芳しくない年次の様だ。今また再々就職の道に喘ぐ時期を迎えている。

7期として卒業した者は499名で、その中、不幸にして亡くなった者が26名。卒業後38年を経て、結構危険と背中合わせの仕事にも就いてきて、ほぼ還暦を通過する世代でなお、95%近い残存率は恐らく誇りうるものだと思う。但し、問題はこれからで、二つの要素がある。一つはこれから急激な減勢カーブを覚悟せねばならぬ時期。特に今まで我が身へのいたわりなど忘れ去ってきた我々なれば、大なる自戒と反省と、自重自愛が必要とされている。もう一つは、先程の再々就職にも繋がる話だが、好むと好まざるに拘わらず、平均的にはこれから20年近くの人生を歩む責務を背負っている。俺はもう仕事はやり終えたのだ、“あとは余生だ。のんびりやるよ”など、悠長な

事で済ませる期間ではない。思い出や経験だけに生きるには一寸長い。後輩や子孫のためというよりも自分自身のために。アクティブに、挑戦的に、積極的に取り組んで行くべき人生が、我々の行く手であると思っている。

## 14期生会

◆石黒 正昭

14期生会は、卒業30周年記念総会および懇親会を、5月6日グランドヒル市ヶ谷において実施しました。陸、海、空それぞれの期生会は盛んに行われておりましたが、合同の期生会は、10年ぶりという事で、開催に当たって、半年ほど前から役員を選定し、準備にかかりました。一番の心配は、何人の出席が得られるかでしたが、北海道から沖縄までの同期生約200名ご婦人60名のほか、招待者として卒業当時の校長大森寛氏を始め、教授、指導官等30名余のご出席をいただき、盛大に催されました。総会においては、おそらく現役最後の期生会になるであろうことから、新しい同期生会規約の承認が行われました。

引き続き行われました懇親会においては、まず卒業時の班編制でテーブルにつき、物故者に対する黙祷から開始されました。新会長吉田正君の挨拶に続いて、大森元校長の祝辞をいただきましたが、その矍鑠としたお姿とお元気な言葉に、さすが！校長と感動すら覚えるものがありました。

途中、学生時代のスナップショットの映写があったり、1年生当時の班に席替え

をしたりして、「やあ！やあ！元気」とか、「おっ！変わらなね」とかの声が飛び交い、頭の白さと薄さや顔の皺の多さを忘れ、30数年前の青春の真っ只中に戻り切って、楽しく、有意義な一時を過ごし、大盛会のうちにお開きとなりました。

14期生の役員は次の通りです。

会長…吉田 正 君 (航空会長)  
副会長…渡辺 元旦 君 (陸上会長)  
斎藤 隆 君 (海上会長)

## 24期生会

◆会長 — 高橋 均

我が防大24期生会は、平成12年4月1日(土)グランドヒル市ヶ谷において、「防衛大学校第24期卒業20周年記念パーティ」を和気藹々と盛大に実施しました。

開催にあたりましては、準備委員長を半澤君(現空募人事一班長)にお願いするとともに多くの目黒地区入校学生の皆様の御協力により、陸、海、空の組織力を最大限に発揮してOBを含め全国の同期に可能な範囲で連絡をとりながら、やとと実現に至りました。まさに、防大創立の意義の一つである統合の実を挙げる事が出来たものと感じております。

当日の参加者は、有珠山の災害派遣対応もあり、残念ながら関東周辺勤務者が主体となりましたが、遠くは鹿児島から駆けつけてくれたOBもあり、同期生約140名が集まりました。

受付では、10年後の開封を楽しみに、

タイムカプセルに入れるメッセージを各人記入して貰いました。また、会場内では、久々に会おう同期、まさに20年振りといった同期、そして風貌からは思い出せず名札を確認して驚き合う同期など、大隊別に配置した会場内のあちらこちらで学生時代の話が花が咲き、時間を忘れる程の盛況振りでした。そして、帰路の電車の中で学生時代と卒業後の20年間をしみじみと思い出す貴重な一日でもありました。尚、パーティ参加費の残金と併せて2名の方々のお志を、参加者全員の同意を得まして、24期生会として防大50周年記念事業への支援金とさせて頂きました。

OBを含め同期全員にとの方針で連絡にあたりましたが、結果として連絡がなかった同期の皆様には、この場をお借りしましてお詫び申し上げます。

## 26期生会

◆平山 力

西暦2000年、

### 防大第26期同期生会

第26期会は、西暦2000年11月24日(金)、グランドヒル市ヶ谷において、恒例の同期生会を、無事終了したことをご報告します。時期はずれのミレニアム、いえいえ、4年に一度、オリンピックの年を同期会としています。

当日は、前日が祝日の金曜日にて、「日程に異論あり」の声もありましたが、徳永元中隊指導教官、陸海空及び自衛隊OBの同期生160名(同期生の約1/3)



が参集しました。皆、気持ちは若き防大生ながら不惑の齢をすぎ、「草原の後退、白髪、太った、痩せた」、お互いに傷口をなめ合う近況報告をしつつ、再会を喜び、和気藹々のうちに同期の団結を深めることができました。(写真は第1大隊)

「次回の幹事は?」「俺か?」の声を残しつつ、4年後の再会を誓って、それぞれ自衛隊、会社等の現実世界に帰ることとしました。

## 38期生会

◆会長 石井 浩之

### 防大入校から10年目を迎えて

同窓会の諸先輩方並びに後輩の皆様におかれましては、各勤務地等において益々御活躍のことと存じ上げます。

この度、同窓会本部の御厚意により投稿の機会を得る事ができましたので、筆無精の身をかえりみずにペンを執った次第であります。乱文乱筆に關してはどうぞ御容赦頂きますようお願い致します。

我々38期生の近況であります。陸・海・空いずれの部隊におきましても現場組織の牽引車としての責任を与えられ、奮闘の日々を送っている最中であり。また各職域における学校等での教官、区隊長及び指導官として後輩の指導に汗を流す者や、向学心に燃えた同期の中には、防大研究科をはじめとする修士または博士課程に進んで更に自己研鑽を積み将来に備える者等、様々なジャンルにわたって活躍の場が広がっております。

かつて、小原台において寝食を共にした仲間が全国、そして海外で活躍する姿は、その話を耳にするたびに身震いするような期待感と、自分も負けてはいられないという心地よい向上心をかき立ててくれるかけがえのない財産であり、失敗をおそれるあまり、ともすれば消極的になりがちな私たちが自分自身を奮い立たせるのに十分な活力剤となります。これは、小原台での数年間を共に過ごした者だけに許される特権であり、同期として

の絆をより深いものにしていくファクターであると最近になって特に考えるようになりました。

一般的にある期間において目標を共有し、達成する過程において苦楽を分かち合った集合体は、その過程を経ない人間よりも強固な団結心と個々を尊ぶ精神が身に付いているといいますが、防大生として互いの理想を語り合い創り上げた38期生の信念は、一社会人、自衛官となった今となっても、それぞれの職域における責任の重さや現実につづかりながらも必死になつて現状の打破と将来への向上を模索し続ける私たちのトリガーとなつていきます。

私事ではありますが、先日結婚をして家庭を持つにいたりました。私にとつて機会を見つけて同期と酒を飲むことが何よりの楽しみでありますから、必然的に妻が私の同期と顔を合わせる場面も多くなります。そんなときに妻は「あなたとあなたの同期の間には、私には入り込めない何かがある」とよく言います。私にとつては普通の付き合いでしかないのですが、やはりこれも小原台で培ったある種の財産ではないかと再認識した次第であります。

先日、48期生が私の所属する部隊へ研修にやってきました。はじめて目にする早期警戒管制機に目を輝かせながら、説明係の私に鋭い質問を投げかけていました。

真つ黒に日焼けして初めての夏期訓練を終えようとしていた彼らの目からは力

がみなぎり、現実には妥協しつつあった私の心を初心に戻してくれました。引率の指導官は私の同期でありました。

ふと気がつけば、防大坂を登り小原台の門を叩いてから10年の月日が経ちました。諸先輩方からはまだまだヒヨコと言われそうですが、これを21世紀に向かう38期生のよい節目として、更なる飛躍を誓うステップにしたいと思います。

今後とも変わらぬ御指導の程よろしく  
お願い致します



# 支部だより

## 北海道地域支部

支部長 檜山 貢

北海道地域支部は、平成9年9月発足して以来、3年が過ぎました。

この3年間は、各支部の基盤整備に努め、地域支部としては、役員選出、理事会・代議員会の開催等その他、事業は、実施していませんでした。

平成11年度に入り、組織の基盤整備の柱となる「会費の徴収」、「名簿の作成」、また事業として「防大入校者の激励」を代議員会で決めました。

「会費の徴収」、「防大入校者の激励」は、実行しました。

しかし、「名簿の作成・配布」は、現役OBが圧倒的に多く、且つ転属の多い現況に鑑み、概成したものの、配布までには至っていません。

画期的なことは、「入校者の激励」を初めて実施したことです。

北海道出身の今年の入校者38名に対して、高価な本人のネーム入り「ボールペン及びシャープペンシルセット」を、入校記念品として贈呈しました。

贈呈・激励には、ハゲ頭の支部長(3期)では、かえって入校学生が自分の将来の姿?を想像し、勉学意欲に悪影響が

あると判断しました。

それで、髪の毛フサフサ・眉目秀麗な小津・札幌地連部長(14期)に、地連部長会議に上京の際、小原台の母校まで足を延ばして貰いました。

記念品は、入校代表者数名に直接手渡しました。入校者は勿論、学校側にも大変好評だったとのことです。入校者の勉学意欲の向上に役立てば幸いと思えます。

今後も「北海道地域支部」としては、活動の狙いである「後輩(学生)のため、実際に役立つこと」、「地方で軽易に実施できること」これら2点から、この種事業を着実に継続実施していく所存です。

## 九州地域支部

支部長 中野 純人

九州では十年前に自衛隊退職同窓生の組織として、九州防大OB会が発足し、三年前の自衛隊現職、退職合同の同窓会組織への変更もスムーズに実施され、組織の運営と各人の帰属意識も概ね定着した。

これまでの活動は、年一回の総会、懇親会名簿の作成、自衛隊行事への参加で

あったが昨年度は、地域支部及び県支部の旗の作成と九州地区の部隊のPKO派遣に伴う募金を行い、今年度からは、さらに定例行事として、防大学生の部隊実習時の激励(現地部隊実施による激励会に退職会員も参加する形)、会員参加のゴルフ大会(十月実施、六十人参加)、戦没者慰霊(福岡地区での日本海海戦記念慰霊祭への参加及び各地での護国神社行事への参加)を実施した。

国際関係、国内ともに問題は山積し、このまま放置すれば日本の国は自壊するのではないかと心配される今日、小原台で教育を受け、その後国の安全保障に直接タッチして同じ絆を持つ防大同窓生の組織として、相互の親睦、団結と意識高揚を計るとともに、国民の一人として部外への働きかけについても、可能などころから一歩ふみだしたいものと考えている。

現在、九州では県支部として福岡、大分、熊本、宮崎が組織されているが、今後は全県に組織ができ各県毎に退職会員と現職との連携がさらに強化され、現地レベルでの活動がさらに活発化されるよう切に願っている。

## 沖縄地域支部

事務局長 佐藤 修二

沖縄地域支部は、平成9年11月設立(会長…1期海 小西 忠)後3年が経過しOB…11名及び陸海空現役約200名で活動をしています。

主要な活動内容としては、年度総会及び懇親会、防大生部隊実習支援、防大入校者への記念品贈呈及び沖繩寮歌祭等への参加です。

平成12年度は、地域支部総会において副支部長の藤井建吉氏（陸7期）に「イランに勤務して」という演題でイラン駐在武官時代に体験されたイスラム社会における「インシャーラ…すべての物事は神の御心で成り立っている」等宗教からくる気質等に関する講演を実施していただき、盛会に終えることができました。

また例年2月に行われている第28回沖繩寮歌祭（旧制高校等約30校参加）に会長以下20名が参加し、窮屈な防大の制服姿で逍遙歌を熱唱し、他大学OB等との親睦を図りました。

今年度は、夏に沖繩サミットが実施されたため、防大生の部隊実習支援は、春の高射部隊の実習支援のみ（第5高射群計画）を実施しました。

今後も引き続き支部の基盤強化のための事業を計画していきたいと考えています。



## 広島地区支部

総務 土手 義孝

明けましておめでとうございます。

21世紀を迎え、広島防衛大学校同窓生各位及びご家族の皆様におかれましては新たな気持ちで新年をお迎えになられましたことをお喜び申し上げます。

広島防衛大学校同窓会（以下「広島同窓会」という。）は、母校の発展等に寄与することを目標としており、広島経済圏で活躍している同窓生の結集を図り地域社会に貢献するための地道な活動をしてまいります。

年間の活動は、定期総会の他に春・秋にゴルフ・テニス・ハイキング等を計画して会員相互の親睦に寄与しております。諸行事には、会員家族、自衛隊OBで構成する各種団体及び自衛隊協力団体等から多数参加してもらっており、地域に密着した活動をしてまいります。

最近では昨年度設立された関西防衛大学校同窓会と緊密な連携を図り、地域で活動するOBと部隊で活躍する現役の助けが出来る地域の同窓会となるように目下努力中です。

因みに、平成12年度各種行事のうち、ハイキングは、会員の家族と海上自衛隊のOBで構成する「呉桜美会」の会員の参加を得て、広島百山の一つでもある「岩谷観音岩場」等にハイキングを実施しました。また、ゴルフコンペもハイキングと同様に各方面から多数の参加者があり、ゴルフコンペ優勝者は、春が昨年秋に引き続き19期（空）坂田 直文氏、秋は8期（海）大川 博正

氏でした。なお、平成12年度の総参加者数は、延べ300名近くになり、盛況裏に終了しております。

今や、防衛大学校同窓会は、2万名近くの同窓生を有し、同窓生は、部隊や各地域で活躍しており、各方面で影響力を与える組織となりつつあります。この基盤を担う大きな力は地域同窓会であり、同窓会本部としても地域同窓会の発展拡充に格段の御配慮を頂く必要があるものと考えております。例えば、必要な財政的援助の外部主催のイベントを地域で計画するなど地域で勤務する現役及びOBに何か示唆的施策が必要かとおもいます。

21世紀を迎え、地域で活躍している同窓生は、防衛大学校同窓会本部の「夢のある施策」を期待しております。



▲平成12年度定期総会記念公演



▲春季ハイキング

▼秋季ゴルフコンペ



なお、西暦2001年（平成13年）2月24日（土）広島弥生会館（JR広島駅新幹線口から徒歩5分）において平成13年度広島同窓会定期総会・講演会・懇親会等を開催致しますので現役・OB同窓生各位の出席を心からお待ちしております。

広島防衛大学校同窓会事務局

〒730-0014 広島市中区上鞆町2-43

（財）自衛隊援護協会広島支部

（退職自衛官広島無料紹介所）

TEL・FAX 082-223-6900

平成13年度 防衛大学校同窓会予算

(単位：円)

	項 目	13年度予算	12年度予算	12年度比
収 入	会 費 (45期生)	18,120,000	19,740,000	▲1,620,000
	預貯金利息	510,000	330,000	180,000
	積立金からの繰入	2,970,000	2,340,000	630,000
	収 入 計	21,600,000	22,410,000	▲810,000
支 出	事業計画の推進 (現職・OB会員交流)	550,000	1,000,000	▲450,000
	(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	300,000	0
	(相談窓口の設置)	—	50,000	▲50,000
	(ホームカミングデイの実施)	600,000	300,000	300,000
	(会員の出版支援)	50,000	50,000	0
	(防大卒業留学生との連携)	400,000	700,000	▲300,000
	(全国的な情報網の整備)	50,000	50,000	0
	總會/講演会費	1,500,000	2,500,000	▲1,000,000
	期生会支援費 (48期生助成)	100,000	100,000	0
	(45期生助成)	100,000	100,000	0
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,000	0
	開校記念祭助成金	2,000,000	2,000,000	0
	顕彰費献花費	500,000	600,000	▲100,000
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	350,000	0
	職員定年退職者記念品費	100,000	100,000	0
	複写機賃貸料	350,000	210,000	140,000
	電話/FAX維持費	400,000	500,000	▲100,000
	小原台事務局運営費	100,000	100,000	0
	代議員会運営費	700,000	700,000	0
	機関紙発行費	3,300,000	3,300,000	0
	同窓会名簿維持費	250,000	200,000	50,000
	会長運営費	400,000	500,000	▲100,000
	事務局雇用費	2,000,000	2,000,000	0
	本部事務局宅賃貸料	2,900,000	2,800,000	100,000
	事 務 費	350,000	350,000	0
	通 信 費	150,000	150,000	0
	交 通 費	400,000	400,000	0
会 議 費	200,000	500,000	▲300,000	
予 備 費	1,500,000	1,500,000	0	
50周年記念事業委員会	1,000,000	0	1,000,000	
支 出 計	21,600,000	22,410,000	▲810,000	

平成11年度 防衛大学校同窓会決算報告

平成12年3月31日  
(単位：円)

	項 目	予 算	実 績	備 考
収 入	会 費 (43期生他)	22,560,000	23,393,720	
	預貯金利息	1,190,000	1,207,997	
	広 告 代	未定	569,790	
	同窓会名簿売上金	0	611,460	
積立金からの繰入	0	390,000	供託金の返還	
収 入 計	23,750,000	26,172,967		
支 出	事業計画の推進 (現職・OB会員交流)	1,000,000	1,065,840	ホームカミングデイ実施
	(同窓会主催親睦交流会開催)	500,000	295,909	
	(相談窓口の設置)	50,000	0	
	(会員の出版支援)	50,000	0	
	(外国留学生OBとの連携)	300,000	676,021	シンガポール支部設立
	(全国的な情報網の整備)	50,000	1,050	
	總會/講演会費	2,500,000	1,110,539	講演会キャンセル
	期生会支援費 (47期生会助成)	100,000	100,210	
	(44期生会助成)	100,000	100,000	
	校友会対外活動助成費	1,000,000	993,210	
	開校記念祭助成費	2,000,000	1,816,710	
	顕彰碑献花費	600,000	100,210	
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	251,594	
	職員定年退職者記念品費	100,000	142,878	
	複写機賃貸料	120,000	307,253	複写機更新
	電話/FAX維持費	500,000	272,384	
	小原台事務局運営費	100,000	100,210	
	代議員会運営費	700,000	748,776	
	各期生会連絡調整費	300,000	0	
	機関紙発行費 (作成)	3,300,000	2,027,571	
	(発送)	—	818,317	
	同窓会名簿維持費	200,000	180,470	
	会長運営費	500,000	200,000	
	事務局雇用費	2,000,000	2,000,000	
	本部事務局宅賃貸料	2,750,000	2,815,336	
	事 務 費	350,000	101,708	
	通 信 費	150,000	55,825	
交 通 費	400,000	292,960		
会 議 費	500,000	85,617		
予 備 費	1,680,000	1,267,525	同窓会記念品作製	
50周年記念事業委員会	1,500,000	1,500,000		
小 計	23,750,000	19,428,117		
次年度繰越	0	6,744,850	財産に繰入	
支 出 計	23,750,000	26,172,967		

## 同窓会総会及び懇親会のご案内

平成12年度同窓会総会及び懇親会等が下記のとおり開催されます。ご出席を賜りたくご案内申し上げます。

記

- 1 日時 平成13年3月9日(金) 16:30～20:00  
 (1) 総会 16:30～17:30  
 (2) 講演会 17:30～18:30  
 (3) 懇親会 18:30～20:00
  - 2 場所 グランドヒル市ヶ谷 (03-3268-0111)  
 東京都新宿区市ヶ谷本町4-1
  - 3 懇親会費 4,000円
  - 4 連絡先 防大同窓会本部事務局  
 (局線: 03-3351-8910 fax兼用)  
 (専用線: 8-6-28895 fax兼用)
- 参加される方は、同封の返信用葉書にて平成13年2月9日(金)必着でお申し込みください。  
 (※欠席の方は、返送不要です)

## 平成12年度同窓会行事

平成12年度同窓会行事が下記のとおり実施されました。

- 11月4日(土) 顕彰碑献花式  
 (於 防衛大学校)  
 同窓会長が執行者となり、本年度の顕彰者「余語圭太(41期・空)」君のご両親をはじめ、学校長、学校職員及び各期代表者の参列を得て、殉職同窓生87柱のご冥福をお祈り申し上げます。
- 12月7日(木) 代議員会  
 (於 グランドヒル市ヶ谷)  
 87名の出席(委任状を含む)を得て、落合君(7期・海)を議長に互選し開催され、下記議案が承認されました。
  - 1 平成11年度事業及び決算報告並びに財産目録
  - 2 平成12年度事業報告
  - 3 平成13年度事業計画及び予算案
  - 4 防衛大学校創立50周年記念事業報告
  - 5 会則の変更(会計細則)
  - 6 来年度の人事(理事・監事)

## 本部・事務局からのお知らせ

小原台事務局		本部事務局		会計監事		理事		副会長		会長	
局長 高橋 通彦	局長 野澤 邦彦	局長 川名 正浩	局長 杉本 光	同 森 寛太郎	同 田中 厚彦	同 菅 博敏	同 菅 博敏	同 菅 博敏	同 菅 博敏	同 菅 博敏	同 菅 博敏
14 (陸)	13 (空)	5 (陸)	6 (陸)	3 (空)	4 (空)	2 (空)	14 (海)	15 (陸)	7 (陸)	6 (海)	5 (空)
10 (空)	10 (海)	10 (陸)	9 (空)	11 (空)	10 (陸)	9 (海)	9 (陸)	8 (陸)	8 (陸)	8 (陸)	8 (陸)

平成12年度同窓会本部役員

北海道地域支部	東北地域支部	西部地域支部	中部地域支部	東海地区支部	関西地区支部	広島地区支部	熊本地区支部	宮崎地区支部	本部直轄支部	小原台クラブ
支部長: 榎山 貢(3・陸) 場所: 札幌市内	支部長: 阿部 賢吉(3・陸) 場所: 仙台市内	支部長: 中野 純人(2・陸) 場所: 福岡市内	支部長: 小西 忠(1・海) 場所: 那覇市内	支部長: 江戸 満(1・陸) 場所: 名古屋市内	支部長: 牧 次郎(2・海) 場所: 大阪市内	支部長: 松浦 育郎(1・陸) 場所: 広島市内	支部長: 園山 清(1・陸) 場所: 熊本市内	支部長: 竹之下 憲弘(1・陸) 場所: 西都市内	支部長: 菅沼 祐亨(1・陸) 場所: 市ヶ谷	支部長: 菅沼 祐亨(1・陸) 場所: 市ヶ谷
39 (海)	31 (空)	38 (空)	33 (海)	20 (空)	40 (陸)	32 (空)	38 (空)	32 (海)	18 (海)	18 (海)

地域支部等役員(平成12年末現在)